ビアトリス



八月號

ビアトリス

第一巻第二號



ビアトリス 第一巻第二號 目次

我れは歷々見たり、朝ぼらけ
東は薔薇もて飾られ、
空あきらかに、日の女王の
柔かき影して高くのぼるを、
その輝きは狹霧もてつつまれたれば、
我が眼は長く眺むるを得たりき。
その如く天人の手より投げられ、
車のうちそとに迷ふ花雲の中より、
橄欖の枝を冠となし、
燃え立つ紅の衣のうへ、
綠の袿(うちぎ)をまとひ、白き面紗(おもぎぬ)したる
女性の姿こそは現れたれ。

『泣くことなかれ、なほ泣くことなかれ
あゝダンテ、泣くは凡ての惱みより
汝にふさはしきことなれども。

我れを眺めよ、我れこそはビアトリスなれ

――ダンテ『神曲』淨罪界第三十歌――

婦人と智的生活

山田わか

各階級を通じて智力的婦人は今日未だ甚だ少ない。婦人の、人と對座しての話題が、人の噂でも、着物の話でも、又臺所の話でも差し支へないが、もう少し研究的に話を深く廣くして行く習慣をつくりたいものである。唯、ありのまゝを、それも、ほんの上つらを話し合つて、直ぐ、笑つておしまひにしてしまうのでは誠にもの足りない。たとへ、初對面の人でも、すぐ、心のありのまゝを吐露して、お互ひをぶつかり合せて見たら、どんなに生き〳〵とした交際が出來るであらう。さうすればお互ひの智力が知らず〳〵の間に磨かれて行くわけである。だが、今の處多くの婦人は未だ其處迄も進んで居ないやうである。

科學は女の頭腦に不向きだとか、高等敎育は女らしさを破壞して、本當の女の使命を果させるに女を不適當にする、とか云ふ議論は、勿論、とるに足らない。智力の進んだ婦人の少ないと云ふ事は、そんな事よりも、もつと、ずつと深い處に其の原因をもつて居る。

或る婦人は仕事が多過ぎて研究や思考の餘裕がないし、或は婦人は仕事がなさ過ぎて怠惰に流れる。又或る婦人は無益な奢りや快樂を逐ふて下らなく日を送つて居る。勿論、又、修養きちがひのやうな女もある。けれども、さう云ふ熱心な女は大抵結婚前の女で、その修養を嫁入り道具の一つにしようとして居る。であるから、狂人のやうに熱心に勉強して居ても一度結婚と云ふ港に着くや否や、折角、それ迄にいくらか學んだ知識も切れた草履かなんぞのやうに打捨てゝしまう。

が、何と云ふても、婦人の智力の發達を最も有力に妨げて居るものは、先天的に利己主義な男である。妻の能力が夫のそれに優れて居る場合には妻が活動した方が双方のために經濟上社交上都合がいゝのだが大抵の男はそれを厭ふやうである。又妻が公人としての位置をもつて居る場合に彼女の意見が夫の意見と同じであるならば差し支へないが、併しそれが反對である場合には、男は大へん困るやうである。最も進歩した人でも妻が自分と反對の意見でも發表すると、(實例は澤山はないが)一種の侮辱を受けたやうに思ふやうである。

妻の能力の發達が夫の仕事に都合のいゝ場合には夫は喜んで妻の手傳ひを自分の職業の上に受ける。醫者は看護婦或は助手替りに、技師は傳道の幾分かを、科學者は研究にとりかゝる準備をさせたり、原稿の校正をさせたり、目錄や索引をつくらせたりするであらう。時には又内容の仕事をさせる場合もあるであらう。

醫者の夫婦、俳優の夫婦、學者の夫婦なぞ、よくある事であるが、このいづれもの場合に於て、大抵は妻の實力が夫のそれよりも小さいから、夫は社會上の位置又は有形無形の權力を破壞される事はなく、納まつて居るが、もし妻の方が能力も優れ、名聲もあがつたとなると、事が面倒になる。極端

な例ではあるが、或る男聲樂家が、同じく聲樂家であつた妻の人望をねたんで、妻の歌ふ時に、彼女をヒッスさせるために自ら人を雇ふて聽衆の中へ入れて置いたと云ふ事がある。

婦人が智的生活に重きを置かうとすれば、彼女は夫から受ける障害の外は女性に一種特別な心理、生理上の狀態及び子供に對する母務がある。子供のためにしなければならない仕事、心配、疲勞は無限である。故に、さうするつもりでなくとも、自然、智力の修養は怠りがちになる。

實際、この智力的の望みをもつた人としての女と、母としての女の間のディレンマは困難なものである。この困難は雇人を使へば、いくらか、らくにはなるわけだが、併し若い結婚者の大多數には經濟がそれを許さない。で、今日、我々のとらねばならぬ急務は男子に、婦人の手にある家庭の性質、價値、及び範圍を（普通男子は知らずに居る）了解せしめ、妻子に對する義務の正確な觀念をもつて貰ふ事である。さうすれば婦人の負擔も幾分か輕くなつて少しの餘裕は出來て來るわけである。

乳呑兒をもつ婦人が化粧して着飾つて夜晩く迄遊び步いたり、何ぞ秘密な計畫でもして居れば、彼女の血は熱し、肝臓をいため、乳は出なくなる。從つて子供は瘠せて靑くなる。けれども婦人が子供に乳房をふくませながら、プラトーと共に考へ、デカルトと論じたからとて、彼女の母としての義務が等閑にされると云ふ事はない。

だが、プラトーとは人の名であるか、場所の名であるか、叉は食物の名であるかも知らない頭で、多くの婦人は母になるのであるから、子供と家庭の重荷で身動きも出來ないやうな事になる。何の考へも、方針もなく結婚生活に入り、子供が出來、だん〳〵負擔が殖えて來ても、何處迄が當然自分の肩にかゝるべきものか、どの邊からは周圍の壓制の結果であるかを考へやうともせず、駄馬のやうに

重荷を負ふたまゝ、喘ぎ〳〵一生を送らねばならぬ事になる。が、さもなければ上すべりのする輕薄な心で、ごまかしの生涯を送つてしまう。婦人がかう云ふ狀態にある事は、婦人自身も不幸なら、夫も不幸、子供も不幸、從つて社會の大不幸である。

で、つまる處、婦人は結婚前に於て、もつと、しつかりした知識の芽を頭へ植ゑ付けて置かなければならない。たとへ、小さくとも健全なる芽が出來てさへ居れば、子供が生れても家庭の義務が殖えて行つても自分の態度次第で其の芽を育てゝ行く事が出來る。そして判斷力を養ひ、自分の負ふべきものは責任をもつて負ひ、夫の負ふべきものは夫に、社會の負ふべきものは社會に負はせるやうに、明らかなる處置をとる事は自分のため、又同性のため有益な仕事であらう。

——鈴木綾子——

眞ひる日の强き光に枯れもせで咲くや一本ひるがほの花。

ほとゝぎす夜更の空に啼くもよし星一ッさへあらざるが故。

我に秘し妻をめとりしおん君も恨らまじ一人歎してあらむ。

忘れ得ぬ旅を思ひて今日の日も足袋(たび)などつくらふかなしやをみな。

汽車の音遠く聞ゆる眞夜半は東京の街思ふによろし。

何事も思ふにあらずとあきらめし我身にあれどうらきる心。

つゝましさをとめの如くねむの花咲けどさみしや君あらぬ家。

其日の或る一家（一幕）

山田邦子

（夕方日の落る時人々すべての病を患へるもの鬼に憑れたる者をイエスに携へ来る。その邑こぞりて門に集れり。）

馬可傳第二、三二、三

登場人物

マリア　（十六歳）生れながら足枯たる娘
アンナ　（十八歳）其姉
其父　五十歳くらひ
其母　四十歳くらひ

時　キリスト御傳道時代
場所　カペナウイムに近き寂しき村。

此人々の住む家

一見粗末な農夫の家、右手と左手に各戸口あり、左手は入口にて右手は次ぎの間に通ふ。正面の中央より少し左に大いなる窓ありて青々とした野の木らしきもの丶林が見えてゐる、（そこにたぶん野の路あるべし）右手に高くノアの箱船より鳩をは

なちやる莚の古きものがかゝつてゐる。室の中央に木造りのテーブルと同じく木造りの椅子四脚、右の上手に別に小さきテーブル様のものあり、其前で姉娘アンナは羊の毛をつむいでゐる。

アンナは生々とした愛らしい娘、いかにも信仰の深い父母に育てられたといふ純潔さが見える。ブロンドの髪は渦を巻いて房々と後ろにたれてあり、一ところくゝつた處に名もない小さい白い花が一つさしてある。

夕日が斜に窓から光線を投げてあたり物淋し、アンナはしきりに毛をつむいでゐる手をふと止めて全身何物にか打たれたやうに頭をさげて何事かほんの少し祈り、直ぐに晴々とした顔をあげて獨言を言ひはじめる(注意、必ず厭味でないやうに)

アンナ　きつと大丈夫よ！マリアはきつと歩いて歸つて來るわ、オ、嬉しい！あのマリアがどういふ様子で歩いて歸つて來るんでせう、飛んで來るかしら、笑つて來るかしら、お父様やお母様はどんなお顔してゐらつしやるだろう………オ、嬉しい…(不意に立ちあがつて双手を胸に組んで身をゆする……と、だんだんに不安な雲が顔にかゝつて來て瞬もしないで一寸の間何かを見つめつゝ急に悲しさうに腰をおろして)あゝ、でもあの名高いエス様でもマリアの足は癒らないとおつしやつたらどうしやう、とても此子は立てませんとおつしやつたらどうしやう、あの出て行つた時の通り、マリアは矢つ張り驢馬に乗つて歸らなけりやならないとしたら……お父様お母様、淋しいお顔をしてお歸りになるのだとしたら……

やがてアンナは又一心になつて祈りはじめる、其丸い肩は祈りの爲に優しく波を打つ……と入口の處に人の足音が近づくアンナはハツと立ち上つて宣告文を讀まれやうとする罪人の様な表情で入口を眺めてみゐる。

アンナの父登場其顔は嚴粛に引しまつてゐる。

アンナ　お父様！　(アンナは父の胸に飛んで行つて慄えてゐる)

其父　アンナよ！吾等の神は讃むべきかな、マリアの足は癒やされました、アンナ、マリアの足は立つ事が出來ましたぞ。

アンナ　まあお父樣！（アンナはいきなり父の双手を持つて暫く夢中で振つてゐる）

アンナ　さうしてマリアは歩いて來ますの……いつ來ますの、お母樣と御一緒ですかまあどんなでせう……

其父　もう村の入口くらひは來たゞろう、何しろ俺たちが歸る時、丁度邑の門にはヒシ〳〵と四方八方の人が集まつて來てゐて身動きもならない程だつたよ、そこをこぎ出して來たのだよ、なかにはもう鬼に憑れてへと〳〵になつてゐる者をしばりあげてやつと連れて來てゐる人もある、杖をついたり驢馬に乘つたりした人が一杯で、それは〳〵こんなにも、不幸な人たちは大勢あるのかと思ふ程大勢の病人や、それからそれを見物する人だちがまるで渦のやうに動いてゐるのさ、そのなかを、マリアを連れて通つて來ると「それ信仰によつて醫された潔い少女と其家族のものが通る」といふので、吾れも吾れも祝つてくれる、なかにはもう咽び泣いてマリアの髮にくちづけする婦人などもあつたのだよ、そのなかを私たちはやつと通りぬけて村の一本道に出て來ると私はお前がどんなに一人で心配して待つてゐるかと思つて、お母樣と相談して一人先きに驢馬を飛ばせてやつと來たのだ、もう驢馬はマリアに用はないのだつたからねーォ、神よーもう間もなくやつて來るだらう……ア、、何んといふ有難い日であつたことか、ほんとに何んといふ。

（此話を聞いてゐる間、アンナは始終其膝を手でしつかりこすつたり、双手を我れにもあらず握り合せたりして嬉しさと有難さに充ちた顔をうなづかせて聞いてゐる。父の言葉がきれると息を一つついて

アンナ　お父樣、私そこらまでお迎へに行つて來るわ、よろしいでせう、早く早くマリアの歩くのを見たいんですもの。

其父　アヽいゝともいゝとも、まあ行つて早くよろこんでおやり、さうして早く歸つて來ておくれ。

アンナ　アヽ嬉しい、じやあ私行つて來ますわ。（アンナ父の額に優しく接吻していそ〳〵と出て行く）

夕日のおひ〳〵かぎれてゆく室のうちで父親は一人靜かにひざまづいて祈つてゐる。

其父　……何んといふ有難い一日をあなたは私と私の家族とに下されましたことか、とるに足らぬ私どものために…あるかなきかの私どものために……

窓の彼方の方角より入口の方に向つて晴々とした話聲がだん〳〵と聞えて來る、人は見えず。

さうしてエス樣はどんな方？それは〳〵天使のやうな立派な方でせう。

いゝえ、私どこかで見た事のあるやうな方でしたわ、一度だつて見やしないけれど……けれどもね、何んとも言はれない明るい鏡に向つた時のやうな心持がおそばに行くとする方でしたわ。

其母親と、アンナとマリア連れだちて登場母親の顔はどこか聖母マリアを思ひ出させる顔だち、マリアは其姉よりも沈んだ、然しより立派な顔だち。

三人が父親の方へ歩むと同時に父親は立ち上る、と四人の瞳が合つた時一種の電氣に打たれたやうに四人一所に立ちすくむ、さうして言ひ合せたやうに双手を胸に組むで、全身の力に押されたやうに頭をたれて默祈す。

夕日全くかぎれし時靜かに幕

これは私が生れて始めて書いた脚本の原案のやうなものであります、私は自分がかういふものを書く日があらうとは夢にも思ひませんでした。不思議な心持に押されてこれを書きました、舞臺の約束などは一切知りませんから其道の方がごらんになつたらさぞかしをかしい處が多く且つまとまつてゐないだらうと思ひますこれはまだ〳〵一通りの骨ぐみのやうなものでまだ完成しては居りません。此骨ぐみで肉づけをして見たいと思ひます。こんなものを發表するのをお恥しく思ひます。

白鳥の如く

生田花世

鶴吉が家出をしてからもう五個月にもなつてゐた。

此村から十人近くもの若者がそれぐ大阪や神戸地方に働きに出てゐたので、それを頼つて、鶴吉もそこで働いてゐるのであらう、そして少しでも金の溜つた時分に便りをするのであらう、かう皆んなから彼は思はれてゐたのである。妻のおよねも亦さう思つてゐた。それに今日、隣の國との境界に近い山の伐木をしてゐる男達の歸つて來ての報知には、鶴吉は官林の傍で首を縊つてゐると云ふのである。

およねは是を聞いて喪神して了つた。

およねは氣を確かにしてからも全身の顫慄がいつまでも止まない。なかく涙も出ないのである。嘘のやうに思つたり、又眼の前にふらくと下がる鶴吉の手足が見えたり、どうしても心が鎮まらぬので、冷たい水で頭を幾度も冷やしたり歩き廻つた。

大阪に居るのだと誰にさう告げられた譯でもないが、さうでなくては辻褄の合はないやうに思ひ詰めてゐただけに恐しい絶望が彼女の心を砕くのである。

『あゝ、――首を縊つて……』

およねはかう悲しげに叫んで、恐しい最後を遂げた夫を、虚空に凝視めながら、柱に獅嚙み付いて氣狂ひのやうに頭を打ち當てた。

およねの心には鶴吉が家出の前夜、二人の間で起つた喧嘩が忘れようとしても忘れられない、いづれ自分の方が無理だつたかも知れない、淺墓にも自分の騷ぎ立てたのが惡かつたかも知れない、けれど家迄何故出たりしたのか、餘り酷い復讐ではないか、可愛いゝ子供まである仲ではないか、餘んまりだ、餘んまり邪險といふものだ、餘んまり薄情といふものだ、かうおよねは五箇月の間日として夜として思はぬ日はなかつたのである。

およねよりか二つ年下の二十五であつた鶴吉は、彼女の遠縁から來た養子であつた。纖弱な神經質な身體で、百姓には似合はしくない顏をしてゐた。陰欝で、不平も苦情もすつかり胸底に疊んで人には去り氣もない風をするそんな内氣な性質だつた。自然およねが内外に心を配つて引廻すやうな工合になつてゐた。およねはそんな女であつた。赤味を帶びた顏の醜い女であつたので、鶴吉との緣は村の娘達に不思議な興味などを抱かせてゐた。

かうした二人の仲も滿雄といふ男の兒の生れるまでは少しの波風も立たないで、平和な日が過ぎたのであるが、二人目の子供が生れる前頃から、嘗て夜など外に遊び歩いた事のない鶴吉が、淨瑠璃の稽古に通ふと云つて夜が、毎晩遲くなるやうになつた。

おはつと呼ぶ溫和しい愛らしい娘が師匠の家にあつた。おはつは村の評判娘となつてゐた。稽古に集る若い男達は、すしやのお里、お染久松、また三浦の助時姬などの世話物を語る眼でちら〳〵と傍

で縫物をするおはつを見るのが嬉しかつたのである。さうした若者の中に花車な言葉少い美い顔をした鶴吉がまじるやうになつてから、誰云ふとなく、女が思つてゐる、男も思つてゐる、女がかう云つた、男がかうした、そんな嫉妬半分の噂が、若い男達の間から村の娘達、母親達の耳にひろがつた。それが到頭およねにも聞えたのである。およねは平生弟のやうに頼りにもならずにゐた今迄の物足りなさが一入思ひ知られて、忍び兼ねる口惜しさ、淋しさ、嫉ましさ、腹立ちしさに錯亂したやうになつて、それがまた姙娠時の生理的な昂奮にも驅られて、どうしても怒りを抑へる事の出來なくなつて了つたおよねは或る夜歸つて來た鶴吉の胸を掴んで激しく突きかゝつた。

『あなたはようもまあ、――』

『そんな覺えはない』

『そんならもう行かんやうになはるか？』

『…………』

『よう覺えがないと云へる――』

およねはぎら〳〵する眼付きで、鶴吉を脅かした。疑へば益々疑はれて、發狂でもしたやうにおよねの顔は蒼白めて唇がびく〳〵と異様に顫へた。けれど暗い眼をした鶴吉は何にも云はないで、眉の間を怪しく痙攣させながら、不快と苦悶とに堪へないやうにごろりと横に轉がつて了つた。それから長い間經つて何時となく病的な嫉妬の情の鎮まつたおよねが、見れば暴風に吹き倒されたものゝやうに横はる細い鶴吉の姿に、思はずほろりとして、つく〴〵氣の毒にも可惜しくもなつて寢床を延べて、優しくそつと搖り起した時、男はばつと眼を見開いておよねの顔を見た。その眼尻には涙がにじんで

ゐた。
翌朝彼女が眼を覺ました時、鶴吉は家に居なかつた。どこに行つたのであらう、昨夜の事を思ふ時、およねは胸が激しく不安になつたので、方々を探し歩いたが何處にもゐない、朝日がいつものやうに鮮かに東の山の上に現れた時分、いつも持つた例のない男洋傘と風呂敷包とが無いのが彼女に直ぐ彼が遠い所へ行つたのである事を思はせた。風呂敷の中には種々な書面と、五圓近い貯金の通帖とが入つてゐたからで。

およねは一番に師匠の家へ行つた。そして近頃の彼の模樣や云つてゐた事を聞いて見ると、師匠よりか、おはつがよく知つてゐた。娘は愛らしい其の眼を暗く曇らして呟いた。

『鶴さんは此間の稽古の歸りしなに、私も大阪へ行くけんなと云ふてゐたでわ、それからまた後ではあゝ世の中が厭でならん、人間が厭でならんと云ふておいでた！』

と悲しさうに彼女はおよねに眼をそむけた。

翌朝早く、鶴吉の弟の半作は知らせてくれた樵夫と一緒に山に行く事となつた。檢視の人々も亦半作達と一緒になつたので、一行五人は死骸を持つて歸る爲の畚を中にして山峽の奥深く辿つて行つた、路は水源に近い岩が屛風のやうに立つてゐる傍から傾斜にさしかゝり深い松の木蔭を潜つてうねりながら登るのであつた。まだ朝霧が山峽を暗く鎖ざす夜明け前、鶴吉は一人とぼ〳〵とこの阻道を辿つたであらう。半作は小さい時から兄思ひであつた。彼は弱々しい兄の身體や、言ふ事も明かに口に上ぼす元氣のなかつた、それのに嫂の赤ら顔と、話するにも力を籠めて壓迫するやうに急き込むのとが、

いつも自分の心に苦しい印象を與へてゐたのを思ひ出してゐた。定つた空間の中で嫂の身體が段々に脹れ廣がるために押し付けられて萎む兄の小さな身體がいつも彼の眼には映ってゐたのである。だがとう／＼兄は消えて了つたと彼は思つた。彼の心には兄に對する憐愍と、嫂に對する憎惡との混亂した感情の爲に騷いで、鬱ぎ込んで皆の後について歩いた。

谷々がずつと見下ろす事の出來る處まで登つた時、秋の初めの涼しい風と、濕つた山の爽かな香氣が木々の間を流れ、薄や、時節を遲れた淡紅い石竹が、黒みがかつた紫の、眼を開いたやうな桔梗とともに赭い山の肌を飾つてゐた。或る杉の木の下を通りすぎた頃、鶴吉の死を知らせて來た樵夫は――もう白髮の疎らに生えてゐる頑丈な男である――それを見出した昨日の模樣を話して云ふに、

朝から斧を入れてゐた大きい一本を伐り倒した時、立木の影はもう晝に近い事を示してゐた。一番年老つて疲れ易くなつてゐた彼は若い者達の元氣な働きに輕い羨ましさを感じながら、けれどまた慈るやうな心持もして、いつものやうに湯を沸かす枯枝や枯草を集めようと少しく場所を離れて、境界標の立つてゐる處に行つたのであるが、其處には短い緑草と小松とがあるばかりで、よく燃えるやうなものもなかつたので、官林の傍の松葉を集めようとのそ／＼と足を運んだ。鳥が飛び、獸が奔る外には入るものもない官林の蓊鬱とした木々は陰影の層を見せて果てもなく續いてゐる。是れだけ繁つた山が一つ有つたらばなあ、彼はかう思つたりした。

折柄數丁距つた瘤のやうに盛り上つた處に生えて枝を下に垂らしてゐる松の間に白い鳥がをりてゐる、向方に向いてゐるのが此方に向いてゐるのか明瞭分らないが、可成り大きい。はて、何の鳥だら

う、彼はかう思つて凝乎と見たさうである。彼は小鳥が所好であつたからで。鶴であらうかと彼は思つた。維新の頃に彼が生れた時分には此の村の田の上を眞鶴が二三羽折々飛んで來た事がある。然し今はもう鶴も、山では鹿も棲なくなつた。何の鳥であらう。そして子供のやうな好奇心から手頃の石を二つ三つ其れに飛ばして見た。けれど鳥は動かない。鳥は青い松の葉から永久に離れないもの丶やうに密着いてゐる。變な鳥ぢやないか。彼はかう思つて萱や灌木を押し分けて一歩一歩松に近付いて見た。鳥は彼には頓着もしない。

『翼が小さすぎる』と彼は不圖氣が付いた。さう思へば尾が長く垂れすぎてゐる、松の葉の邪魔で見えなかつた輪廓がはつきりして見ると、まあ、これは骸骨であつた。灰白色に曝れた骸骨は松の枝で裂いた手拭で首を吊つてゐるのである。彼は興を醒まして引返さうとしたが、また充分見屆けようと其下まで近付いた。ふらりと下がつた骸骨は數箇月の山風や、雨や、太陽にすつかり洗ひ浄められてゐた。それは鳶や烏などがその髀肉を啄いばんだのであらう、肋骨が一本脱けてゐるし、獸が來て手足を咬んだのであらう、肢が壞れてもゐた。けれども骸骨は眞直に白く下がつてゐる。何だか恐ろしい、また美しいものだと彼は暫く見惚れずにはゐられなかつたさうである。

下の草地には洋傘が一本と、小さな風呂敷包とが落ちてゐた。これを見た彼は急いで伐り場に歸つて皆に話した。若い者達の好奇心は旺だつた。で、今度は皆で再び骸骨の下に集まつた。そして立合の上で包を解いて見ると貯金の通帳や手紙類が出た。それには「山岡鶴吉」と云ふ署名があつた。

『これが鶴さんか……』

かう云つて皆の顔は蒼白めたさうである。

『長い事知れずに居たもんぢやなあ……』

樵夫は話し終つて氣の毒さうに半作の方を見た。

伐り場には四人の樵夫が伐り倒さうとする木の下に集つてゐた。檢視達が近附くと皆顏を振り向けて見た。そして中にまじつてゐる半作の暗く蒼ざめた顏に吊意を示すやうに皆自分の眼を地面に落した。

現場へは皆で行く事となつた。巡査達は渇いた咽喉を冷めたい水筒の水でうるほした。半作も皆のする通りにした。けれども路々の疲れや、激しい落膽の爲めに神經を亂した彼はもう地面に打倒れさうな氣持になつて、よろよろと木の根に腰を投げて木の幹に額を埋めた。で、外の人々は半作を伐り場に一人殘して繁みの向方に遠ざかつて行つた。

半作は木の肌に額を凭せながら樵夫の話した兄の死に態を心に描いて見た。白鳥のやうだと云ふ兄の骸骨が恐しくも亦美しくもあつて見惚れたと云ふ樵夫の話は、不思議にも彼の氣に入つたのである。彼は兄が子供の時から山や林が所好であつた事を知つてゐた。そして自分を伴にしては谷の奥へ奥へと先に立つて走つた時、兄はもう谷のどつかに消えて了ふのであらうと思つた事もある、そんな幼い時の思ひ出が胸に蘇生つて來たりした。兄は屹度嫂との不圖した爭論から大阪へ行つて稼いで來ようと云ふ氣になつて家を出たのであらう。そして峠を越えて隣の國の港から船で渡海しようとして、こゝまで來たのであらう。そして路々不圖死ぬ氣になつた。死ぬのであると何かに命ぜられでもしたやうに兄は、彼の木の枝か、此の木の枝かと段々に道を外れて、こんな官林の傍まで探して來たのであ

らう。

『兄ちやは其んな人であつた！』

半作はさう思ふと涙が滂沱と頬を流れた。

柩を中にして人々が伐り場へ歸つた頃は、半作ももう氣持が直つてゐた。それで死人の洋傘と風呂敷包とを持つて皆の後について山を降りて行つた。松風がごうごうと響いて、日も陰に光り、雲脚が騒いで來た。路の兩側の山萩はふらふらと山風に煽られて、青い衣を被いだ女の列のやうに人々の足許に亂れた。巡査は氣遣はしげに空を仰いで云つた。

『日が短くなりましたなあ……』

けれども誰も答へないで默つてゐた。

『鶴さんが歸んて來た』

村の子供達は半作等の姿を認めるとぞろぞろとついて歩いたが、巡査が見返つた時には足を止めたりした。

半作は家に近づくに從つておよねの心が思ひやられて來た。それで生垣を曲り庭に入つた時、軒下の壁にもたれ、子供を抱いて待つてゐるおよねが目に附くと、嘗て覺えのなかつた親しみが涙となつて湧いて來た。今迄の兄に對するおよねの愛の不充分さも、我儘も何も彼もすつかり赦して上げようと云ふ心で胸が波打つた。

『嫂(あん)、――歸つて來ました』
半作はかう優しい聲でおよねの涙の眼を自分も亦涙の眼で見て云つた。
およねは胸も裂けるやうな聲で叫んだ。
『あゝ、――貴郎(あんた)は首をくゝつた……』
近所の人々がおよねの家に集つて、明日の葬式の用意に取掛かつた頃、此の村の秋の日は俄かに黑く暮れていつた。

〰〰〰〰〰〰〰〰

山川の高ききりぎし赤土の徐々に流れて夏は戀ひしも。
夏となりばせうの若葉日に光る小雨まじりの淡きかゞやき。
良き國の夏を思ひつわたつみの水を思ひつほほゑむ吾かな。
みじろがず青き蛙は山茶花の葉に坐りゐてなかぬさびしさ。
丈高きせんだんの木の紅き花にキスをおしまず降る降る雨は。
しかすがに君を思へばやるせなし寄るおばしまに微雨つきず降る。
美しき人二人ゐて華やかに笑めば胸鳴るねたみか吾の。

星長晴子

銀のかんざし

若山喜志子

遠く別るゝとて母上に

離(さか)りすめば相見ての日が終(つる)の日ぞ髪結はせてとのらすたらちね

うつし世のたらちね吾れぞ髪かきも生のかたみと梳きたまふかも

平打ちの銀のかんざし後(あと)ざしに生のかたみとたびつつ母は

平打ちの銀のかんざし脚長の古風なれどもいろはのかたみ

相見るの日來んか來じかもよしゑやし今日こそ母よ今日こそ泣かめ

久にしてしかも稚子(をさなご)卒てしかば老の父母泣くとぞ見えし

老いの身の父母を見ぬなほまして悲しとぞ見ぬ四方の高嶺

ふる里の古き我家の煤の奥にすみたまふかも老いし父母

のちに二首

はゝそばの母をおもへば浮草のうきねの旅ねゆめ安からず

おもひでゝいもいねらへずこの夜にもかけりてゆかなかなし父母

稲永しづ子様より粽をおくられて

さみだれのちぞのはれ間を木の間づたひ君がおこせし粽のつかひ

ときじくも雨ふる日ごろいつのまに君は刈り來しこの粽草

青々と粽のもちのにほひてはひたすらかなし生くとしあるもの

龍舌蘭

眞夏まひる何にもめげずくわとばかり毒々しかも龍舌蘭は

裸男の漁士のかよふ砂山にいらち刺立ち龍舌蘭は

みちのべの一葉の草もふれがたき毒草なれや眞夏の光り

昨日は久々で母と二人で裁板の前に坐る様な機會を得ました。そして幾年ぶりかの望が叶つて懐しい娘らしい一時を送る事が出來ました。母の膝には父の總べての過去を語り盡して餘り有る様な見苦しい袴が有りました。私の手にはあなたと離す事の出來ないかゝはりを持つて居る彼のメリンスの羽織の片袖が有りました。空は泣き出しさうに鼠色した雲がひくゝ、ダリヤの花が目に痛くしみる様な光をなげて居りました。私は妙に涙ぐましく目に映る物皆が悲しい心をそゝりました。何故か母子共に冷たい何物かを包んで居る様に顔では笑ひ合つてもどうかするとお互に隠し切れない吐息を持つて居るのでした。そして酷く沈默のさびれた世界に入りさうになるのでした。(手紙の一節)

——町井久子——

山梔の花

杉浦翠子

くちなしの花は一輪咲きたりと臥床（ふしど）の我に告げも來しかな

くちなしの花咲きたりと告げくれどこゝゆは見えず木がくれなれば

いたつきのけながくなれば人さへも訪はずなりける紫陽の花

この日頃病みてしあれば新聞に親しみにけり續き物よむ

しみ／＼と讀みてしあれば新聞の記事にも泣けるふしのあるかな

琥珀色に瓶の水飴透きてあり疊の色をうつし居るかな

我病めばおのれいとほしさく／＼と林檎を食みて居たりけるかな

この身はもつれ／＼なれど昨日さき今日散る花はあはれなるかな

逢はなくてかへる路なり日盛りの草のいきれは堪へがたきかね

泉水に金魚動かでみなつきの日照りのつゝく眞晝なりけり

よわ〳〵しいまだ根づかぬ朝顔の苗に雨見ぬ幾日なるらん

待ちこひし雨は降り來ぬ盆栽の鉢をもてこよ庭にならべん

俄雨ふりこそ來たれ我が脊子が今しかへらん夕なるかな

君を待ちて夜をふしけり蚊張ぬちに一つ二つの蚊の居るらしも

さみだれに幾日とざしゝ窓の内こゝの匂ひの何かかなしき

『お、おチヤレンカ、ありがたう、此の恩は忘れはしない、私が汝の家にかくれてから三ケ月、其間ようも心を慰めてくれた、ありがたうよ、チヤレンカ、お前と別れるのは悲しい、淋しい、しばしのよしみがこれ程迄に私を苦しめるのか、』『あゝ判官さま、御一身にかゝはる大事、早々何地へなりと逃れ給へ、妾は君が情の片袖を抱きて、』『あゝチヤレンカ』『さらば判官さま』ひらりと用意の小舟にうちのり星さへ見えぬ暗の庭の霧深さに乗じて落ち行き給ふ、チヤレンカのこらへかねた、涙は夜霧のそれよりもしげく、しばしが程は砂地に倒れて、判官の名を呼び續けた、あ、暗の夜を、ギイ〳〵と音して、何地へたゞよふ捨小舟……あゝチヤレンカは義經戀しさに、夜な〳〵此の濱邊であの哀れな、枝幸(えさし)追分けを歌つて居るさうな！

——小川笨子——

寂しきまゝに

三ヶ島葭

誰が生くる誰が死ぬる世のさまなるぞ死を思ふ眼に火とも映るは

人の手にふと見し花を思ふこと四五たびにして夕べとなりぬ

あぢきなきおもひはつねにするものとさだめ交はすに似たるはげまし

おそらくは杜鵑を待てる我ならん山に向ひてものを思はず

うつりゆく明日の心は見えずして今日にはまたく飽きにけるかな

みづからをあはれとなどは思はねど名なく老いなば涙流れん

全身に血のわきかへる花を見て吐息をもらす寂しきこゝろ

おのれのみかく苦しさに堪へざるかしばらく生きて世にも問ふべき

庭の草水田に植ゑし苗よりも涼しきほどに生ひそめにけり

夕立の籬を打てば朝顔のみどりの蔓のはつれたる庭

走りてもゆかん心を抱きつゝだりやの中におり
立ちにけり

わが心いとすなほにも見ゆるかなもの思ふこと
しばらくにして

柔かき眉を重ねて栗の花小雨のなかにゐめる初
夏

見出でしは心の奥のかなしみかはた悲しみを秘
むる心か

おのが身の果敢なき運命(さだめ)泣きくらす日さへ時さ
へたまはれる身ぞ

翼伸べて眞夏の空に鳶舞へり朴の一葉のひるが
へるごと

恨無しかく思へどもみづからをなやますものゝ
影の消えずも

はやかゝる愁となりてこの胸にひそめる明日を
見じとしたるか

なつかしく人をば思ふ日となりて皐月の雨の降
り出でにけり

子を抱く力かへらばおのが世に足らはぬものは
なしとなさまし

頭をばつと向けたれどこれの尾のともなひがた
し蛇(へび)の身のさま

とこしへのわが住家ともなつかしき林の中を走
りてし汽車

越えしともおぼえずさてはこれもまた幻のごと
消えにしものか

君とゐて朝を朝とも夜を夜ともおぼえぬ身こそ
悲しかりけれ

夜なれば針にも臥さん木綿蚊張かほに觸るれど
心にもせず

朝

久保田富江

先生がおなつかしい。戀しう御座います。

今朝はまだ雨が降つてをります。そして私の心は隅々まで、しつかりと落付かせてくれてゐます。

――先生は今何うしてゐらつしやるのでせう。――

私は今凝つと一つ所に先生の幻影を見てゐます。けれども、その幻影の先生が、私にはあまりに大きすぎて怖う御座います。何故斯うも私は先生から離れてゐるのでせう。何故私が先生に近寄ることが出來ないのでせう。幻影までが、觸れてはならない、近寄つてはならないといふやうに、いかめしく構へてゐらつしやいます。私は何うしよう。只先生が戀しい。おなつかしう御座います。

私は、先生！　先生の前に潔く赦していたゞかねばなりませぬ。現在の、今の私の感激の中には、先生から容れられることのみを願ふ想が震へてゐます。赦して下さいませ。赦すとお一言仰有つて下さいませ。そうして短い私の過去の罪をお消しなすつて下さいませ。

私は今以前の純に立歸つてをります。精神は其上にも尊い純潔を求めて已みませぬ。自分の過去を反省して、純に一時被はれた罪を拂ひ退けて、再び以前の純な私を認めました時、私の心は自分の爲

の歡喜に躍りましたものゝ、只先生に不忠實であつた時の一事を強く響かして、今私は弱々しく活きたいと思つてゐます。

先生にお逢ひしたくなりました。誰も居ない、眞實に誰も居ない靜な所で、先生だけにお逢ひし度う御座います。先生、私のために、不忠實な私のためにそうして逢つてやつて下さいまし。その時に以前通りの私を御覽なすつて下さいまし。先生のお便りに接したい。先生のお手紙が欲しい。何卒〳〵私の哀れな乞ひをお容れ遊ばして……。

此の半月ばかり病のために床に就いて居りまして、近頃腦がすつかり惡くなつて了いました。私の軀が內外用の種々な藥で保つてをります。寢てをります間も、此の儘先生に離れて死ぬではなからうかと悲しまれましたり、お逢ひしずに死んではならない、赦していたゞかないで死んではならないと、それぱかりを思つて精神だけが、努力の念と共に熾烈に戰いてゐました。

過去つた日の事は只夢で御座います。何を悲しみ何を苦しみ、そうして何を泣いたり悶えたりしてゐたので御座いませう。今となつて稍々冷靜な心的位地から振返れば、あまりに狂的な所行が多すぎました。無理解な他方面からは疑惑視され、深い廣い間隔を置かれて別物扱ひにされながら、自分自身は只管に焦燥煩悶のこゝに喘ぎ〳〵息づいてゐたので御座います。すべてが恐ろしい。私は恐ろしくて堪りませぬ。

自分だけの戀のために、果敢ない戀のために、假令一瞬間とは云へ、澤山の義理を缺いで了つて、先生に申譯ありません。それを先生はお赦し下さるでせうか。義理と戀と兩立させることが出來るものなら、噓にも私は苦しみやしない。否々誰だつてさうで御座います。先生は私を可哀想と思召して、

きつと赦して下さると信じてゐます。それ共、私が悲しんで今更お赦しを乞ふほど、先生のお胸には私の何物もが入つてはゐなかつたでせうか。私の先生に對する熱心も、靜な先生の前にはわけもなく退けられるか、踏まれるかするのでは無いでせうか。若しさうであつたら、あゝ私は何うすれば好いので御座いませう。泣いて好いものか悲しんで好いものか、それとも自分を裏切つて捨鉢になつて好いものか。――いえ／＼、そんな事は思つてもならないことで御座います。――先生は私を信じて下さつた。――曾てのお言葉を私は信じてをりますから、此上をお信じ下さいと申上げても、先生は容れて下さるで御座いませう。先生！　今の私の決心をおきゝ下さい。私は努力します。もう何事にも堪え忍んで、ゆる／＼と勉强致します。どんな苦痛にも戰ひませう。もう何の愚痴も申しませぬ。先生。私のためにお祈り下さいませ。私が一身を燒爛らして了ふまで努力しようとする將來の道に、飽迄純なれとお祈り下さいませ。

　昨日初めて○○へ行つて知らない大勢のひとに逢ひました。然し私は失望しました。何の意味も無く失望を感じました。私は行かなきあよかつたと悔まれます。私にとつて何の力强いものが無いやうに思はれました。私よりどの位悧巧で物の解りの好いひとばかりが集つて、どのやうに意味のある種々な話をしてゐたか、逆上したやうに頭ばかり熱してゐた私には、其中から何物をも摑むことが出來ませんで、何とはなしに失望して了つたのです。それも矢張り私のすべてが意氣地なく出來てゐる故なので御座いませうか。群衆から胴上げされて氣を失つて了つた時のやうに、只私は赫々とするばかりで默りがちで御座いました。それで押出されるやうな苦痛から拔けて歸途に就きましたが、何の事は無い、虐たげられて閉じ込められた人間のやうに、心は慘目にすくんで寂しい理由の分らない涙が

こぼれるのでした。もう〇〇へは行くまい、大勢のひとの中へは入るまいと、わけもなくさう考へました。

私はまだいろ〳〵のひとに打突かつて、圓くなれない世間見ずなので御座いませうが、大勢のひとたちに混じつて居る間にも、先生のお宅のことを想ひ浮べずにはゐられませんでした。靜な物を仰有らない先生の前に坐つて、私たち若い女が各々に可憐らしい心持ちで凝つとしてゐながらも、深い事を考へずにはゐられなくなる程の、强い或物がひそんでゐる先生のお家、そして集る女たちが皆可愛い好いひとばかりだと思ひます。先生の廣いお心と大きいお姿が燒きつくやうに心に戻つてまゐりました。私は先生が好い。誰よりも先生が好い。どんな所へ行つても先生程好い方は無いやうです。先生に愛していたゞかねばならない私でした。先生におすがりしなければ生きられない私だと、しみ〴〵考へたので御座います。

昨夜中の心理は、種々な方面に散らかつて定まりませんでしたが、今朝になつて私は判然と自分の事を考へました。私に何のやましいことがあらう。先生に對して何をやましく思ふところがあらう。それだのに何故先生を恐れてゐるだらうと。ほんとうです。私は先生の前に開け放した邪氣ない姿を見せることが出來る身だと思ふのです。そして只だ一言先生から、過去の事を忘れてやると仰有つていたゞければ、それで私の氣が濟むのだと思ひました。近い内に先生と二人限りでお話が出來ると思はれたり、先生から赦していたゞけると考へたりして、今日は何となく嬉しい氣分になつてゐます。先生、私はもうそうと信じて、お逢ひする日を心待ちしてをります。先生のお優しいお手紙を待つてをります。

遂今しがた、私は朝の化粧のために窓の傍で鏡に向つてをりました。するとその窓の鐵棒に何やら黑いものが下つたやうですから、ひよいと顏を上げると、大きな鼠がチョロ〳〵と下りて來たのです。私は胸がどきつとして思はず
『あ、ねずみが。』
と叫びましたので、鼠は直ぐ軒の裏に姿を隱して了ひました。そこで私は、無聊に軀を持餘してゐるやうな赤猫を抱き上げて、窓の上に載せてやりました。もう一旦見逃した鼠ですから、再び出ては來まいと思つたのですが、兎に角猫をのせてやりますと、恰度エリキに引かれたやうに、又スル〳〵と鼠が下りかけて來ました。忽ち猫はそれを捉へて了つたのです。口にくはへて庭へ飛び下りた時の猫の目が、云ふことの出來ない突差の勝利に、まんまる〳〵輝いてゐました。
私は、猫が鼠を捉へた時に、猫の心を思ひやるよりも、ほんたうに只どき〳〵して遠くで眺めてゐましたが、手を叩き足を疊から浮かして子供のやうに喜んだり胸を鳴らしたりした心理が、まだ判然と解りません。私は大きな聲を立てゝ、——その聲が何といふ言葉に出たか覺えませんが、——顏を赤くしてワイ〳〵と物を云つたのです。私の心は見る〳〵晴やかになつて來ました。ふとした暗示が、暫し鏡の前に立つた私の心に與へられました。
先生、今日は好い日です。きつと何か好いことがあるだらうと思ひます。私はわけもなく物を喜んでをります。戀しい〳〵先生の、おなつかしいお手紙を久しぶりにいたゞきたう御座います。過去つた日の事は、具體的にも文字の上にも、すべてお忘れ下さいますやう、幾度も〳〵お願ひ致します。そして物を樂しんで、今靜に勉强してゐる私に、此の上にも喜びと幸福を與へて下さいまし。先生の

お便りを、明日？　明後日？　と待ち佗びてをりますから。

先生にお逢ひすることが苦もなく出來る。私はそれ一つを、さう信じて愉快に日を送つてをります。戀しい私の先生、私を失望させず悲しめずに、どうか御無理でも喜ばして下さいませ。今の私には不安は御座いませぬ。罪の無い邪氣ない自分ばかりが、希望に震へる心を靜にいたはりながら、こう美しく優しく、只管に純に向つて歩を進めてをります。

水薬の匂ひ浮べて腰硝子青く光れり梅雨晴れの朝

眼を撫でて靜かに眠れ夢に入れ病忘れと君はいへれど

またしても發作來にけりまたしても臓薬のまねばせん術もなし

白百合よさはな揺れそね香にむせぶさはな揺れそね息づまるかな

本郷京子

亡者に送る手紙

五明倭文子

緒苧うる聲が往路に聞えて今年も亦妾の好きな盆祭が來ました。白い盆提灯を軒に吊して株香臭い線香を焚いて、蓮の花や白玉の團子などを飾つて、先祖からの佛を迎へる此うすら寂しい盆祭が、年中行事のうちで妾は一番好きで、又常に待遠しいことに思つてをりますの。それはお亡母様だつて同じで御座いますわね。常時は寂しい暗い佛壇が瞬く蠟の灯に金色燦然と輝き、處狹きまでに並べられた多くの位牌の中で最も新らしいのが御母樣、あなたが三日の間、此家におかへりになつて朝夕妾の影身に添つてゐて下さるのかと思へば、ほんとに妾は此盆祭が好きで／＼なりません。その盆祭も今年で、もう七年といふ歳月を經て來ました。七年經つた今日になつても、妾はあなたが妾一人を此煩はしい浮世に殘して、逝つてお了ひなすつたとはどうしても考へられませんの。死んだ母親へこんな手紙をかくなんて……と人は笑ふか知れませんけれど、妾は此世に於いてお母樣程愛慕し、信賴すべき誰人をも未だ見出さないのですから……否、此後だつて決してそんな誰人をも見出さないだらうと思つてゐます。又見出したくもありません。子供、子供はそれは可愛いに違ひはありませんけれど、これは自分が母親といふ責任からしても、充分手を盡して立派に養育してゆかなければなりませんもの……親のようにこちらから縋つたり甘えたりする譯にゆかないではありませんか。

とは申しますものゝ矢張り子供は可愛いもので御座いますのね—、あなたが此妾に瀧いで下

すつた程の、純潔な深い〳〵愛情を妾もまた子供の上に垂れたいと、此頃はつく〴〵とそれを感じてをりますの。なぜと云つて妾は此頃、或る一人の友達が其夫と其間に出來た三人もの子供とを振り捨てゝ、他の仇し男に走つたみじめさをまざ〳〵と見せつけられましたので……それは品江さんといつて、あなたも尠しはお見覺えがあるか知れませんが、妾よりは三ッか四ッ位年下で小柄な、眼のクリ〳〵とした可愛い娘さんでした。そして今考へると彼女は小さい時から、餘程早熟な性だつたのですわね。學校の運動會や遠足の時などは、わざと突飛な服裝をして人眼を惹かふとしたり、又は新任の教師の時間などには眼鏡をかけて來て、わざ〳〵一番前列へ出して貰つて、其教師の腦にいち早く自分の印象を彫みつけようとしたり、時には色々な難題をもちかけて教師を辟易させたり、兎に角校中でも評判な女でした。そして在校中に早やある郡長の家へ嫁はれてゆき、それから間もなく東京の學校へ出るようになりましたの。その後暫らくは妾も彼女の消息をきゝませんで居りましたが、或時圖らずも妾は或雜誌の上で彼女の名を見出したのでした。そして其書いたものは別に、怠らず研究したり努力したりしてゐる女の、深い造詣があつてといふのではないようですが、可なりに筆の廻る、そしていかにも直感の鋭い女であるといふことが、そのキビキビとした書き振りに現はれてゐましたので、妾は直ぐ昔の彼女を思ひ出してなつかしく、早く逢つて見たいような氣持ちになりました。それでとう〳〵妾は或時彼女をその住居に訪ねて行つて見ました。

質素な六疊に通されて汚れて冷たくなつてゐる座布團の上に坐つて、妾はいろ〳〵なことを胸に畵いてゐましたの。間もなく次ぎの間から出て來た品江さんは、可愛い眼元も左に片靨のよるのも、すべてなつかしい昔の品江さんでした。餘り口數はきかずに愼ましやかにきちんと坐つて、ポツリ〳〵と談され乍ら、それでも絶えず妾の容子や態度などに氣をつけてゐるようでした。茶縞の袷の胸も膝も垢光りに汚れて、品江さんは其時もう四ッに三ッの二人子持ちで

あつたのでした。そして其子供達の父親といふのは以前結婚した郡長の息子ではなくて、尾原とかいふ男でした。つまり品江さんは近頃流行る同棲といふのをやつてゐたのですね。併し妾は品江さんの一家が決して嫌ひではありませんでした。品江さんは元より未だ逢つたことはなくても、その尾原さんにも子供にもいゝ感じを有つて、そして其家庭の平和に幸福なるべきことをねんじてをりましたの。

それがどうでせう、品江さんが三人目の男兒を擧げてから半年經つか經たぬに、其一家は餘りに思ひ切りよく破壞されて了ひました。其破壞者は誰でもない品江さんと其仇し男とでした。仇し男とは誰か、お母樣、あの上村のおぢさんね、今は日暮里の百姓家に引きこもつて、肥し車の後を押したり芋を掘つたりして、何だかトルストイ翁でも氣取つてゐるようなあのおぢさん達が、一昔も以前には夢中になつて騷ぎたてた何とやらいふむづかしい主義のお仲間とかで御座いますそうな。そして相當な地位も思想も抱いてゐる男だと申しますのに、なぜそんな青年を誤らせるような眞似をしたので御座いませうか。でも其男、矢張り筒袖なんか着て、昔の上村のおぢさんも同樣見るからに威勢のいゝ男なんだそうですの。あの品江さんなら矢張りそんな男が好きになるんで御座いませうね。妾の他の友達はそれを評して、英雄の偶像崇拜から來たのだ、などゝ申しましたが、もしそうとしたら品江さんもまだ〳〵若い、と云つても無理もありませんわ。もと〳〵二十二や三の未だ思想もかたまつてゐない娘さんに何がわかりませう、此浮世といふものがそう早く呑み込めて堪りませうか。それを矢鱈に持ち上げた、つまり其男達が惡いのですわね。中には面白半分にか鼻の下が長くてか、さん〴〵賞めたてゝまだ其上に、此姦通事件に對しても、品江さんの行爲は正當だ、スミスの宙返り飛行よりもさらに勇敢だなどゝ、馬鹿氣切つたことを云つてる男もありますけれど、まさかそんなのは正氣の沙汰ではありますまい。それからまだ〳〵面白い男もありましたわ。其男は自分の創作のうちにまで、自分には唯一人の思想上の異性の友が

あつて……とかSさんの手紙を懐にして孤り漂泊の旅に落ちゆくとか、又かと思ふ程にそんなことを公衆の眼の前にさらけ出して、盛んに彼女のお幇間(たいこ)を叩いたものでした。其男？まだ妾は逢つて見ませんけれど、一度寫眞では見たことがありますの。其寫眞を見た時、妾はどう云ふ譯か猛獸といふような感じが致しました。それは寫眞と申すものは決して眞實(あて)にはなりませんわね。妾だつて安刷りの寫眞版に出されて、大笑ひしたこともありましたもの……ですけれど其男が矢鱈と、若い女の家を訪問したがつたり、それがまたかなり執拗に、こりずまに女に接近していつたりするような噂を耳にする度に、妾はまた其男の上を思つて、何となくあの清玄や法界坊を連想せずにはゐられませんでした。でも法界坊は芝居で見てゐても餘り好漢すぎて、決して〳〵憎くない坊さんで御座いますわね。これは談がわき道へ外れましたが、今は品江さん、どうしてゐるでせうか、一番可愛相な子供達はどんなにしてゐるでせう。それから尾原さんは？ これがまた何といふ夫でせうか、幽靈ではありますまいしもつと自分の影をはつきりとさせて、妻の罪惡を訴へたらいゝではありませんか。併しそれをもなし得ないで密かに品江さんのかへつて來ることを待つてゐられるのでしたら、品江さんは一日も早くその罪を悔いて尾原さんの許にかへらなければなりますまい。それがまた一番彼女(あのひと)のために幸福な道では御座いませんか。それともまた彼女が自殺でもするといふのなら、それは妾も贊成ですわ。人はどんな罪を犯してゐても、一旦死といふものに絶つたならば、それですべては救はれるものではないでせうか。播くものは苅る、自分で播いた其罪は又自分で苅らなくてはなりますまい。

一體彼女は何のために恁うした間違を惹起したのでせうか、唯虛名を賣りたいためか、それとも亦生活の壓迫に堪へ切れなくて、それで其男と關係したのでせうか、若しそうとしたら、彼女は世間の藝娼妓や妾奉公よりも、より以上に墮落した女といはなければなりませんわね。併し妾はそれ程迄に彼女を卑下したくはありませんの。では矢張りラブの爲めに……それも結構

です、まだ彼女とても若いのですものね。併しそれならそれで又女らしく神妙にして、あの梅川や小春、お七やお夏のように末の世までも、人の涙を自然と誘ふほどの、あはれさを含んでゐるのならまだしもですけれど、自分に勝手な理窟をつけて其醜行を公衆の前に傲然とした態度をもつて庇護しようとするに至ては、其面の皮の厚さは雨中の蟇蛙と同様では御座いませんか。此

さて御母様、あなたはどう思召しますか。ラブといふものに就いて……ラブなどゝあなたの最も お嫌ひな 言葉を用ひて 濟みません けれど、もう妾だとてこれでも人の兒の母で御座いますもの、少しはいふこともお許し下さいましな。妾は思ひますね、ラブなどゝいふものは焚き火も同様で、燃えて了へば後には何にも殘らない、實に愚なものだと……それは誰しも一度は燃える時もありませう。或は二度も三度も…花だとて遠くから眺めてゐる間が一番美しい、そしてだん／＼と接近してゆくまでが嬉しい、併しそれを手に取つて、手折つたらどうでせう！ 忽ち落花狼藉して見る影もなくなつて、手折らぬ昔が懐しまれはしないでせうか。俗にいふ三年の戀も何とやら、結婚してから數年經つても尚其結婚當時のような純潔な、熾烈な愛を保つてゆかれる人がありませうか。

美しい焚き火の後のみじめな殘骸を思つたら、先づ情炎の燃え上る前に、危い岸で一歩、意志と理性の力に踏み止まらなければなりますまい。品江さんだつて其男と別れるのは、早や眼の前に迫つて見えてゐます。そして妾が前にいつた二者、その何れにでもよつて身を修めなければ、彼女もまた倫落の女となつて、やがて慘たらしい骸を野邊にさらして朽ち果てませう。そしてそんな女が婦人思想界の先覺者だなどゝもてはやされるのでしたら、妾は何よりも世間に娘を持つた多くの親御さん達の、其心の苦勢からして先づ思やらずには居られませんわ

お母様、妾はまア、このように長談義をして了ひまして「さぞ御退屈で御座いましたでせう。ほんとにお盆だといふのに人の棚おろしでもありますまい。——

大正五年七月十三日夜

初戀

——チャールス、ガーヴキス

坂本野母譯

或初冬の黄昏時、フローレンス町を過ぎていつた一臺の馬車があつた。中にはまだ年は左程にも見えぬが、其口も眼も明かに或悲哀を物語り、頭髮さへ半白になつてる人と、未だウラ若い美しい娘とが乘つて居た。男はヘラルド、ホテレージと云ふ英國の、著述家としてはかなりの名聲のあつた人で、別に資産も持つては居らないが、曾ては地位も名譽も共に得べき筈の人であつたが、數奇な運命の弄ぶがまゝに年來の希望も抱負も、まだ咲き揃はぬ蕾の中に無慘にも剪られ盡して仕舞ひ、剩さへ今は己が最大の所有物に迄頼んだものさへ果敢なくも奪ひ去られて、當年の意氣も今は悲哀の絶頂に迄至つた。彼は多年相愛の妻を失つてからは、もう年來の名譽心と愛する者と共に墓深く埋めた心地に、今は只名もない憐な男やもめとなつた。

『ステラ、お前眠つてる？』

馬車がポエトリーと云ふ蒸發した町に來た時に、彼はやさしげに我が娘を見乍らこう云つた。

もう直きに着くよ』

『否、お父さん、私眠つてなんか居りませんわ、私最早直ぐだと思ふと悲しくて……私何年迄もこう

『してお父さんと二人限り乘つて歩るき度いの、暫らくの間でもお父さんと別れなければならないと思ふと、もう何だか悲しくつて……』

『それは俺も同じだ、出來るならどうして離れ度いものか、ケレドね、お前の行末を思へば思ふ程、俺はお前を側へ置いとく事は出來ない、な、女々しい情實にかられてお前を今はなさないのは、それあ我儘と云ふものだ、いや寧ろ慘酷かも知れん。愛する者に殘されて仕舞つて、今亦お前を手放すのはね、お父さんの耐えられない事だが、未だ若い、望の多い前途を持つてるお前を、わしの樣な者の側に置く事はどうしても出來ん、若い者には矢つ張り若い元氣が要る、丁度花が太陽の光線を要するやうなものだ。お父さんはな、ステラ、我慢の出來んのをしのんでお前の將來の幸福を祈る、な解つたらふね……』

『……お父さん、デモ私お母さんの事忘れること出來ませんわ』

『ステラ、けれ共な、此悲しみは何時か又喜びとなることもある。ソレ、天國で又みんなして樂しい平和な會合をする事が出來るじやないか』

はげます樣に云ふても彼の顏は靑くなり、口唇さへかすかに震へてる。彼はやる瀨ない眼を轉じて窓越しに灯の揃つた町を眺めた。

『さあもう今夜はお母さんの事なんか云ふのを止めやう、それよりかお前は今夜から學校に這入つて、只學問をするばかりぢやいけない、さうして普通のことはみんな能るだけ習つて、それからねえ、こう快活にならなくてはいけないよ。お父さんはな、唯お前の幸福を望んでる、學校もいゝし、校長も親切な人らしいから……而しな、もし萬一入學してから面白くない、幸福な處でないと思つた

ら直ぐにその事を書いておよこし、お父さんはすぐに迎へにゆくよ、わしもな、時々は逢ひに行つてやる、然し餘りひつきりなしでは却つてお前の爲めによくないからね、いゝかい？』

若し今自分が茲で泣いたら屹度父の悲しい胸を倚一層かきむしるにちがひない、と思付いたステラは、泣くまいと一心に込み上げる涙を呑んで。

『お父さん、私も屹度今に快活になつてよく勉强し升、さうして大人になつたらお父さんの娘に恥ない者になりませうね。だから私のことなんて心配しないで下さいね、わたし早々お父さんの御仕事のお手傳の出來るやうにそいからあの、六ケ敷手紙も讀めるやうになり升わね、お父さんも先のやうに又働いて頂戴、働く間でも少しは悲しい事を忘れる事が出來升から、ね。』

『アゝよいよい』と輕く口には答へたが彼の言葉には活氣がなく、彼の目には何の光も漂はぬ、世の中に於ける彼の任務は旣に終局を告げ、大望も消え失せて仕舞つた、そして彼等の冷たい墓場の下では愛する者が己れの名を斷間なく叫んでるやうな氣分に囚はれる程に彼の元氣は凋落して仕舞つた。

やがて馬車は高い鐵門の前で止まつた。

馭者が降りてベルを鳴らすと、横手の門番小舍らしい處から一人の老婆が氣だるい風をしながら出て來て、二人をマジマジと見詰めて居たが、エテレージが刺を通じたので二人を案内した。中庭を過ぎて十數の階段を上りきると、やがて古風の灯の薄暗い一室に、二人は校長の來るのを待つた。間もなくドアーが開いて長の高い骨格の好い婦人が現はれた。校長のボードン夫人と云ふ人で、微笑をたゝへ乍ら前に進んで、

『これが豫てのお話の貴所のお娘子さんですか、エテレージさん』

と挨拶の後に親しげの句調で、同情のあるらしい笑貌を造つてステラを見下した。

『ハイ、これが私の娘、ステラと申ます、豫て手紙で申上ました通り、健康を害して未だに宜しくありません、何分宜敷願ます』

と彼は慇懃に挨拶した。僅か計の會話をとり交し、金子を渡してエテレージは立ち上つた。

『ステラ、それではお父さんは又直ぐに會ひにくるからな、……直ぐに……』

と云ひ乍ら、ステラの固く握つた手を離しながら

『丈夫に勉强をおし』

ステラは校長の居るのも忘れて暫しは、兩手を組んだまゝ、うなだれて、かすかに消えてゆく父の足音に耳をかたむけた。

『……さあもう餘りそんなに考へ込むと病氣になつて仕舞ひますよ』

校長は先程迄の同情なんて今は微塵もなく、只權威ある聲で冷やかに云ひ放つた。

驚怖の眼を見張つて、ステラは校長を仰いだ、彼女は曾て此樣な冷い言葉をきいた事はなかつたから。

『玆は學校ですよ、玆に來た以上はね、もうよく校則を守つて、浮世の事はすつかり忘れて仕舞はねばなりません』と云ひながら卓上のベルを鳴らすと、如何にも醜い容貌の女が出て來た。

『ミス、エテレージをお室に案内おし』

『明日の朝はね、六時半に鐘が鳴りますからね、それに遲れぬやうに。規則正しいと云ふ事は美德の一つですからね、此所では誰でもよく守り升、それではお休み』

ステラは此ミネルヴアーハウスに三十五人の同窓と共に學生生活を初めた。ステラは生徒中の一番痛ましい辛酸をこゝで數ケ月なめた。居園りの者皆が幸福らしくは見えなかつた、最も感情的な父の性質を受けついだ彼女には不愉快な室と、陰險な校長とが非常な苦痛の種だつた。けれ共ステラは曾て一度も父に其不快を書き送つたことはなかつた。父が親しく會ひに來た時でも、何時も樂しい、幸福な日常を語つて父に安心を與へやうとしてゐた、そして小さい胸一つに口に言へない苦しみを堪んで、涙をのんだ事が幾度あつたらう。

娘が幸福とのみ信じてた父は、己は一日々々と亡き人の許に近づいてゆくやうな果敢ない自認を、せめてもの心やりとして淋しく暮してゐた。或日突然父の訃報は憐れなステラを驚ろかし盡した。世界の孤兒となつて仕舞つたステラは、暫の間は父の遺言を守つて、時々の辛苦も、不快も、刻々の艱難も默々裡に忍んでたが、遂には此可憐な少女の限りある忍耐力も、勇氣も盡きて、反撥、覺醒の時が自ら近づいて來た。（未完）

――野中敏子――

ふと見たるわが爪先のましろさよ熱き涙のこぼれける樣

香のみの哀しき君よいさぎよく離れんとなど云ひ給はざる

美しくすなほなれとてはぐめる母には涙見せがたきかな

綠蔭雜語

■夕立と雷鳴——これからはかうした景物を持つた夏が嘸かし猛威をふるふ事でせうが、身體さへたつしやなればどんなにかそれは面白い。旅行なんか餘りした事のない私は、立寄る孤つ家もないやうな野中で、さうした雷雨に襲はれた經驗はありませんが、唯一つかうした夕立に逢ひました。それは野路ならぬ小石川の高臺に住む米國婦人某氏をお訪ねした時、路々もうもの〳〵しく天地の明暗は錯雜して了つて、コツテエジ風の瀟洒とした其の家の玄關のベルを押した時分には雹の樣な大粒の強雨が、矢の樣にはた〳〵と木の葉を射破り、天に冲するやうな火柱がかつと乾の空に直立しました。ベルに應じて出て來たのは明色の捲髮を白い頰に垂れた白衣の若い婦人でした。婦人は覺束ない日本語で、其人居りません、留守！かう云つてにつと笑ひました。で私が歸らうとすると續いて扉に首を差し伸べたハスバンドと思はれる若い紳士が呼び留めました。綠色で明るく飾られた小室で會話の通じない私はジユリエツト、ロミオのそれのやうな二人と時々眼ばかりの笑みをかはしながら過ぎてゆく夕立を俟つたのです。かうした夕立の宿は夏毎に私の胸に涼しい記憶として蘇ります。

■島崎藤村氏の歸朝——された日に三人の令息を椽側に並んだ氏の慈父らしい温顔と、令息達の喜びの包み溢れた素振とをそのまゝ見せた寫眞を新聞で見た私は、近頃にない一種の感じを受けました。洋行する少し前一寸した訪問で、氏の煙草で黑く染まつた齒を印象に殘してゐます。新聞などで氏の名を見る時、いつもあの煙草に染んだ齒が私の眼に浮ぶ。

■不眞面目な人は本當に厭なものですが、眞面目ぶる臭味も亦非常に不愉快なものではないでせうか。私はどうもこの厭な臭氣を放つ人間のやうな氣がしてなりません。どうも私は氣障な人間のやうに思はれて愧ぢる事が度々です。つまり何處かしら私には性格に缺點があつたり、恐しく無智だつたりしてさうなるのですから反省をしなければならないのです。

■ヂプシイの女——私は此頃、メリメエの『カルメン』やウオツツ・ダントンの『エルイン物語』などを讀んでから、ヂプシイの女と云ふのが非常に頭に強く殘つて去りませんが、私が幼い時自然の中で野育ちに生長したからか、『エルイン』物語中山巓でヂプシイの女が戀する男女を再會させる樣な場面が、此れ迄讀んだ此種の中でも一番面白い。自然が女性に生きる靈感を私は樣々に空想して見てゐます。鏡花の『高野聖』などを讀んで面白いのも其の點なのですが、私はまだ〳〵自然に對する觀察が貧しく、そして外面的なのを苦痛に思ひます。（花世）

■しづかに小雨する初夏の一日であつた。庭には大きな紫陽花の花がうなだれて咲いて居た。垣の近くには翠々しい楓と梧桐の若木が茂り合つて居た。香の匂ひが浸みるやうに漂よふ塵一つない淨らかな室に私達はつゝましく坐つて御說教を聽いて居

た。

「…生命とは統一する力を云ふ、もし吾人の行爲が統一ならずして分裂に進んだならば吾人は自殺するのである、吾人はすべての人にすべての物に統一を見出さなければならぬ」

「…我心は清濁合せ呑む大海の如しと思ふは既に慢心の兆である。眞に自己に目覺めた人は心から敬虔なるべき筈である」

私は夢みるやうにボーッとして若い說敎師のつまぐる水晶の珠數を視て居た、その言葉は低かつたけれど力が籠つて居た、蒼白いその顏にはおだやかな熱誠が漲つて居た。

私はその人の姿と言葉をながく忘れられなかつた。

■暫らくの間旅に行く先生を送つて東京驛まで行く。空はカラリと晴れてつめたい涼しい風がお濠ばたにそよいで居る。朝靄の中を音立てゝ走る電車、三々五々行きかふ白衣の人、何だかかう感慨を催させられる。

丁度陛下が何處かへお出でになる時で大勢の巡査が嚴めしく控へて居る。陛下が御乘車になつてから一般客の入場を許される。

カラ〳〵と長いプラツトホームを歩いて石段を昇つて上へ出ると最早汽車が待つて居る。長々と續いた列車の姿を見ると妙に寂しい心持がする。

「すぐ停車場から向ふへ電報打つて下さい、ぢやありがたう」

簡單な先生の言葉を物足らぬと思ふ間もなく汽車は出て行つてしまふ。ボンヤリと見送つて居た私は何ともいへない疲れきつた頼りない氣持になつて、しばらく獨りで佇んで居た。(琴子)

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

■何か讀者のこゝろを樂しませるような、文藝ばなれのしない度合に於いて、涼しいおもしろいものをかきたいと思つても、腦の中の空洞な私故、いくら絞つても振つても元々ないものゝ出て來よう筈はありません。それにこの頃は少し家にゴタ〳〵した用事がつかえてをりますのに、何時も梅雨晴れの頃にはきまつて、からだの工合の惡くなる私は、今年も大抵はブラ〳〵としてものうい毎日を送つてをりますが、どうしても書くといふことに沒頭して了はれない原因だらうと思つてゐます。

■それで近い中に何處か山の湯の方へでも行つて、そこで暫らく健康を復し、こゝろを落ちつけて來てから、雜誌の方も出來る丈は働きもし、又自分の創作にも力を入れてやつてみる心算で御座います。夏の旅日記といつたようなものも此次ぎにはお目にかけたいと思つてゐます。

■折々は皆樣方と打ち寛いだ集まりを致して、お互の親交を溫めたり、または其時々にひきついで起つてくる色々な問題などに就いて、意見を交換し合つたり研究したり、いたすことは誠によいことだと思ひます。それから故女流作家のために、追慕の集まりをいたすのなども、結構なことゝ考へます。これは最も近い中に一度いたすかも知れませんから、其節は皆樣もどうぞ御都合なすつて澤山御出で下さるように御願ひいたしておきます。(倭文)

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

■『らしく、ぶるな』とは古い諺ではあるが、私は此頃つく〴〵其金言であると云ふことを思つた。一體ぶると云ふこと位可厭なことはない、貴婦人ぶる、文學者ぶる、藝術家ぶる、數へて

見れば隨分數へ切れない樣此ぶると云ふ言葉は何にでもくつ着くのである、ぶるとは一體衒氣があると云ふことで、一體衒氣のある人位氣障な厭味なものはないと思ふ。私は一體意氣地のない、勇氣のない故であるかも知れないけれど、私はいつも人の前へ出ると、私は何だか自分が足らないものであるやうな氣がしてならないのである、例へて見れば或人と或話をする、其話をしてゐる間はそれで興味を有つて一心に話してゐるのであるけれど、其話が止むと私は直ぐ其後から其話をしたことが可厭になる、何だか取返して了へるものなら取返して仕舞ひたくてならなくなつてくる、又此處で或人と挨拶をする、そしてるうちは可い、がすぐ後からあんなそつ氣もない挨拶はするんでなかつたと、そんな後悔をしながら暫時悒欝な氣分に閉ざされてゐる、そんな意氣地のない私であるから、人が何でも自分の思つた通りに思ひ切つたことを云へる人を衒氣があるなぞと思ふひが目かも知れないけれど、私は近頃の若い人達に――しかも文學好きだとか、又物でも書くとか云つたやうな――にどうもざう云ふ處があると云ふやうに思へる。

■例へば今やつと投書家の範圍を脫したと思はれるばかりの人達、(私が左樣でないとは云はない、私もさうだと云ふことを斷つて說く。)が何かお書きに成りませんかとでも云へば『私は今もう少し愼重の態度を取つてゐたいと思ひます』なぞと云ふのである、何も愼重の態度が惡いとは云はない、然し何もそんなことはもつと先に物が出來上つてからであると思ふ。まだ始めから何にもしない前に愼重の態度を取つたつて仕方あるまいと思ふ。左樣云ふ人は屹度誰かの口眞似をして文學者と云ふものは斯う云ふものであると思つて、所謂ぶつてゐるのである、私は左樣云ふやうにぶつてゐる人は一番嫌であるのである。(たづ)

■時として人は孤獨を欲する。何物にも煩はされる事なく何物にも遮ぎらるゝ事なく、自由に靜かにものを考へたいがために。

一昨日からの私のこの心持はさほど激しい力はもつて居ないがともかくも消ゆる事なく續いて居る。一昨日讀書につかれた眼を仰向いて寐ころびながら眺めた木の葉の綠色、その葉と葉の重なつたさゝやかなすきまからのぞいて居る大空のいろが忘れられない。さわ〳〵と葉から葉をゆるがしてそよ風のわたる音をきいた刹那、私はふと、あゝ風にも生命があると思つた。その瞬間私はさう感じ得た事が非常にうれしかつた。私の胸はいつぱいになつた。身體中がおのゝくやうなよろこびに滿ちた。私の眼からはひとりでに淚がこぼれた、あつい淚の玉がまなじりから流れて、頰をつたひうなじをつたうて脊中に冷たく消ゆる時、私の心は世にも私やかに靜かにその落付いたよろこびの中にしたつてゐるのであつた。淚はあとよりあとよりと流れた、私はさうして泣けることがうれしかつた、私の心の中の醜いものゝ凡てがその淚で洗ひ去らるゝ心地がしてうれしかつた。私は淚にかき曇つた眼で空を眺め木の葉のみどりいろを眺めた。

■あゝ誰にも會ひたくない、誰とも語りたくない。たゞぢつとこのまゝに大空の下に坐つて居たい、何もせず何も思はず、たゞ大空を眺めてゐたい。身體中に新しい力がみちて、働かうと我しらず立上るまで、さうして空を眺めてゐたい、風の音にきゝ惚れてゐたい、いつまでもいつまでも(たま)

祈らんとして

（手記の中より）

草野ゆり

額づいて、主よ主よ、我をして主が御事業の一端を耕さしめ給はんことを——斯う祈りの言葉を云はうとした時、その靜かな心の一隅にふとある女の事が閃き出した、それは鏡の底に映り燃えてゐる炎のやうに、制へても制へても遂にその影は消えず、祈らうとする心持をさへ遮つて了つた。

『人間の死ぬつて事は唐突なもんだね、思ひがけぬ人に死神はつくもんだよ、お前も知つてる私の處の向ふの竹尾さんね、今朝野木の原で汽車往生をしたの、この子を可愛がつてくれたあの竹ちやんが』

今朝私の家へ訪ねて來た母は上るなり感慨に充ちた表情をして斯う云つて我子を見た。子供の腦には死といふ事が具體的には入つて來ないものと見えて、唯不思議な顏をして、

『お祖母さん藤井の竹ちやん死んだの』

と繰り返して大きく眼を瞠つてゐた。

私共母子は暫く祖母の家へ泊りにいつてゐて昨日歸つて來た許りである、昨日歸る時に向ひの妓樓の張店の格子窓から、上半身を垣見みせて、N子ちやんまたお出で、さようなら、さようならと、吾子に別れをつげた者があつた、それが誠に今曉死を遂げたといふ遊女なのであつた。

一昨日もその前日も、吾子に髮結ひ紅白粉をつけてくれし遊女竹尾、今は既に亡き人といふ、斯くと知らば心して彼の女の顏を見て置きたかつたものを、自殺を遂げさせる程の苦惱を持つ人とも知らずに、歸る車の上から私は輕く挨拶

を交はして過ぎて來て了つた、それが酷く物足りない悲しい事に思はれて來た。けれど若し私がそれを豫知する事が出來たにしろ、到底慰めて慰められるやうな心ではなかつたであらう、又暫時は慰め得たにしても救ふ力が私にはない、然し諦らめて私は無理に自分の心を煩はすまいと努めて見たが矢つ張り彼女の死といふ事が纏りついて來て放れない。

『竹尾さんは男の方よりも苦しんで死んださうだよ、半丁餘も車輪に引摺られて手足首と、散々に飛んでゐたといふことだもの』

母は猶死の毒々しい怖ろしさを説明して私の心を慄はせた。

時は今年今日の四月二十五日拂曉、事實は、たかゞ名も無い一小女郎の情死話、唯一場の悲慘な物語に過ぎない事ではある。廣い世の中に長い時日にどれ程さうした事件があるか知れはしない日に夜に絶ゆる時とてはないとかう輕く見て來たものが、今はなかなか多ければこそ、それなればこそ猶さら私には忘られない、悲歎となり憤怒となつて心の中に暴れ狂ひ出した。

私の育つた廓内には十軒許りの貸座敷があつて、それを取り圍む飲食店抔は多くあつても所謂公娼の數は百に遠い、それのに警察や町役場の手に掛つてゐる駈落者と情死者とは絶え間がない。私もよく情死者を見にゆく人達の後について、好奇心に驅られながら駈け出したりなどもした。ある時はもう既に白木の棺に納められて、他國の者を埋める無縁佛を埋葬する墓地の、大きい公孫樹の下に据ゑられてあつた。新しい棺の白木の底には女の血潮が滲み出してゐるのを見た、其處に集り來たつた人達は女の死を憐れむよりも、口には樓主の損害を悼んでゐた。

『あの紐はどうしたい、男女の胴をふん縛つてあつた紐さ、あれも此中へ入れるだんべい。』

穴掘りの爺が物馴れた調子でその寺の若僧に斯んな事を云つてゐた。凡てが斯んな風に何の造作もなく取り扱はれて、雨風に屍骸が曝し出されやしないかと思ふやうな淺い穴が穿たれて、其處に無縁の新佛の爲に、土饅頭が築かれるのであつた。何といふ暗い短い然も現實暴露の底に浸つた生涯であらう。それを思ふと私は私の

抱いてゐる苦しみ悲しみよりも、あの空を掩ふた綠葉の下に世にも不幸な若い女の卒塔婆が悄然と風雨に打たれてゐるさまを、暗い心の一隅に描き出さずにはゐられない。

彼の竹尾子も亦寔にこの哀れな女の一人である、彼女の爲にせめて祝すべき事は、自分から死に赴いたゞけの悲壯な滿足があつたに違ひないと思ふそれだけである。その一事は苦惱に充ちた半生に嘗て味つた事のない勝利と悅びとを感じ得た事であらう。此の想像の如くに彼女が死に際してある高い情操に觸れたものとすれば、私は莞爾として彼女の死を祝福したい、彼女の群には心にもない蕩兒の毒手に倒されて思はぬ死の旅連れにさへされるものもある。いふにも絕えた最後である。此の氣の毒な人達は矢つ張り私達と同じ樣に宇宙の子であり同じ祖先の血潮が流れてゐる、更に狹めて見ても同じ人種で同じ國民で同時日の流れの上に生きてゐる――と思ふと私の心は眠れない休まらない凝としてもゐられない、と云つてもそれをどうする力もなし考へも出ない、問題は餘りに大きい、そして其興奮が沈まるとぐつたりと疲れて了つた。

彼女は如何なる爲人を踏んで來たものか少しも私は知らない、唯白い皮膚と豐かな肉體とを奇異な裝ひに包んでゐる女が私の眼に殘つてゐる許りだ、何處と云つて特色のない樂天的に見えさうな顏立であつたが、彼女は溶けるやうなうつとりとした眼付をして幼兒の物云ふのを見惚れてゐたり、幼兒と一緖に笑ひ興じたりしてゐる樣子は、大きな苦しみを持つてゐる女とも見えなかつた、あの種の女が素人の女に對して持つ嫉妬や羨望を表した事もなければ、かうした女にありがちな一種の嬌慢や棄鉢な態度も遂に一度も見た事はなかつた。あゝいふ人の謙遜な態度を見ると、如何にその日夜の營みの低さ卑しさ悲しさに、自ら責めて惱んでゐやうかといふやうな同情が、無意識に湧き起つていぢらしくて堪へられない。

無自覺とか無敎育とかさうした言葉や道德上から、あの人達を見る者があつたら、私はさういふ人の淺薄と明盲目とを嘲けられずにはゐられまい、あの女達程斷乎として死にゆくものは

ない、それよりも他に墮ちる路のないのを何としやう。家貧しき爲にもせよ父母兄弟の不幸故にもせよ、又おのれの身より出でしにもせよ、肉に飽き愛に情けに（純な精神的な）燥いた荒んだ生活の中に、もし一人の戀人を得たならばどうしてその全てを傾倒し盡さずに居られよう、けれども傾くるにも傾けざるにも彼等はもう既に人間として此の上なき誠の貧人である、其蕩盡すべき何ものをも持たないのではないか、その時この誠意を如何にしてか相手の人に立證しやうとする時、女が生命にも代へて最後まで維持しやうかとする唯一の貞操を持つてしやうとすれば、矢つ張り古來の人のやうに死にゆくより他に道はない、彼の女の肉體の現存せる限り間斷なく切り苛まれてゆかねばならぬ、何といふ悲慘ないふにも絶えた事であらう、かういふ事は私が今物新しく考へる迄もない近松や西鶴が云ひ古した事の糟粕のやうな感はある。けれど、彼と是とは同じ事でゐて誠に雲泥の相違がある、淨瑠璃の女主人が時代や背景に美化されてゐるにも係らず、是は又何といふ慘憺たる事實であらう。遊君と公娼といふ名から起る連想の相違のやうである。

彼の女が購はれた二百金三百金の金子は、社會に立ちて何か仕事を爲さんと思ふ人には、實にはした金といふ心地がする、然れど彼の女の苦海五年間の月日を算すれば、その大額なのに今さら驚かれる、貧の情けなさ掟の苦しさ人間の弱さ凡ての苦しみに比ぶる人に、死はいと易い瞬間の苦痛である。

あゝ何を思ふも云ふも竹尾子は死せる人である、暫くの程でも我子は如何に彼の遊女達を慰めた事であらう、籠の鳥のやうな彼等の生活の中に、幼きものゝ踊り舞ひ唄ひ話して慰めた事は宛ら天使のやうなものであつたかも知れない、我子は彼の女達を『おみせの姉ちやん』と呼んでゐた。娼婦といへども醜業婦といへども何等の懸隔差別を持たない幼兒の心は神のやうである、その心の尊さこそは神が人の子の凡てをみそなはする愛の寛さである。然しまたいふ人があらう、かゝる女の群に白紙のやうな幼兒を接近させて、實に愚かなる無意識なる母よと、

勿論進んで接すべきではないけれども、幼兒に對する彼等は、賣笑婦の心でない、物質以外の尊きもの人間の中にある美しさを餓え求め渴仰して止まない人である(勿論意識してはゐない)神樣は何故是等の女を救ひ給はぬ、宗教は何故此處迄至らぬかと、私は恨まうとした、そうして心が落ちついてみると、殆んど手を下す術さへ知らぬやうな實際問題が累々として壓し重つて宗教と彼等との間に堅固な障壁を築いてゐるのをみる。人間の問題は此處許りでない、曰く何々、曰く何々、數ふる遑もなければ、何れを先にすべきかさへ知るよしもない、それ程に苦しめる人がある、團體がある、その中の一人も自分自身をも救ひ得ないものが、神の何億萬年計畫の大事業に對して、私をしてその御事業の一端を――抔と僣上極まる祈りを平氣で捧げてゐたのに驚かれた。

主よ、慷慨悲憤の人として徒らに老朽ちんとする者を憐み給ひこの生涯を何事にか役立たせて給へとこの夕べ心から私は祈つた。起き上つて見ると涙で髪の毛がベッタリと額に濡れついてゐた。燃ゆる心、熱い心、薄い紙のペラペラと燃えてゆくやうな果敢ない心は、私に何にもさせてはくれない、燃えて燃えて燃え盡して死滅するのではあるまいか、この不安が又新しく浮かび上つて來た、子供を寢かしつけるにさへ、ふさはしからぬ心持である、祈りさへも出來ない心である、自分の心をさへどうにも私は停められすにゐる。――四月二十五日――

まつ時の十日あまりに長ければわりなきまゝに疑ひもする

つひに我れ君のものとしなりにけりいかほどのもの我にのこれる

相見る日まづ第一にいふことのおもんばかりにけふもくれけり

――須永みわ――

蜥蜴

小林益子

十月の淋しい秋の日は、夕暮に迫られて黄色は光を力なくうすれさせながら、淡い憂愁を包んで庭に照つて居た。

青々と藻のいつぱい浮いてゐるそこひも知れぬ古池の水の中を、すい〳〵と鮮かな緋鯉の赤い脊がくゞつてゐた。

池のほとりに建てられた離れ座敷は、障子がすつかり開け放されて、中に隠居の清造が郡内の搔蒲團を二枚重ねて、かなりの醉態を見せて眠つて居た。圓窓の下のコスモスは白と淡紅の花をたくさんつけて、なよ〳〵と咲き亂れてゐる。丁度夫れが母屋の縁から身をかゞめると見える程高く延びて、圓窓の開け放された小障子の側から中を覗いてゐる。

清造の高い鼾は秋の乾燥した空氣に咽喉を乾かされて、時々苦しさうになつた。

部屋々々がほんのり夕暮の色に包まれて來ると、お師匠さんはそろ〳〵歸り仕度に取りかゝつて、三味線の箱を取り寄せて棹を折つた。

店の表通りの方は、何處からともなく來る夕方の忙しさに、人々の足があはたゞしく運ばれてゐた。

店には忠四郎が只一人帳場格子の中に坐つて算盤を持つてゐた。ふと奥から洩れて來た笑ひ聲の中に、お柳の高い調子が一際賑やかに蓮葉に聞えた。

忠四郎は、ちよつと舌打ちして振り返ると大阪格子から茶の間の方を覗いたが、すぐまた齒擦らしく小耳にはさんだ筆を取つて、帳付けに餘念もない。

小刻みな足音がして、やがて

「お立ちだよ。」

と大阪格子を開けた母親の後から、凄艶な、すつきりとしたお師匠さんのすゞしい目差しと、お組の眞白い顔が見えた。

「誰れかお師匠さんを送つて。」

と、忠四郎の方を向いてお柳が言つた。

忠四郎はませたお柳の聲を聞くと、急に胸をおどらせたが、わざと知らぬふりをして見向きもしなかつた。が、お内儀さんのてまへふと顔を上げると、往來を越えた置場の中に居る喜助を見て、

「喜いどん。」

と、女らしい黄いろい高調子で呼んだ。高く積まれた薪の間を、竹箒の痕を綺麗に殘して掃いて居た喜助は、箒を投げ捨てゝ駈けて來た。

土間に下りたお師匠さんは、又お柳達の方を見てにつこり笑つた。少し酒氣を帶びた目の色はなまめかしく、青い頬もほんのり赤味を帶びて居た。

「ではお内儀さん明日は何分よろしう。」

と、あらたまつてしなやかな手を膝のあたりで重ねて、挨拶をした。
「えゝよござんす。お氣をつけなすつて。」
「左様なら。お柳ちやん。」
「ぢや明日はきつと。」
お柳はにつこり笑つた。
「ご機嫌よく。」お組はしとやかに手をついて低く言つた。お師匠さんは喜助と二言三言爭ひながら、笑ひ聲を殘して出て行つた。
やさしい黒縮緬の撫肩が、忙しい夕方の人通りの中にまぎれてゆくと、お柳はばた〳〵と奥座敷へ駈けて行つた。
そこにはお組がもう次の間との襖の際に、ぐつたり體を寄せて坐つてゐた。水淺葱の半ゑりからうき出してゐる美しい頸筋を、がつくり俯向けて見せてゐる。柿色に三筋の銘仙の袷に黒襟をかけたじみな形が、一層淋しく色白の容貌を引きしめて居る。
「姉さんはどうしてそんなに考へるんだらう。厭なら厭で斷はればいゝ。」
お柳は、相變らず淋しい思案に胸をなやましてゐるやうなお組を見ると、輕い憐しみさへ感ぜられた。見台のわきへ横坐りに坐つて不遠慮に足を投げ出したお柳は、うつとりと疲れたやうな眼差しで池の面を見てゐた。その内いつか知らお組の事なぞは忘れて、腦の中は明日二長町の連中の事でいつぱいになつて居た。やはらかい純なお柳の瞳の色は、好きな〳〵贔負の役者でも想つてゐるかのやうに、仄かになまめかしい熱情を浮べてゐた。

「お柳ちやん。あした樂しみ。」
「え、樂しみだわ。姉さんはいやなの。」
「さうね」
お組は、妹の輝いて居る瞳をまじ〳〵と見た。彼女はもう間近く、嫁がねばならない體であつた。姉娘よりお柳の方をこの上もなくいとしがつてゐる清造は、親戚の人のすゝめるまゝに、お組の爲めに願つてもない好い縁談であつたから本人の心も聞かず獨りで話を極めてしまつた。それがお組の氣に障つて憎惡と底意地の惡い感情が益〻妹に對して燃えてゐた。
「あゝ、もう夕方だ。」
さう云つてもの憂い體を起して廊下に出ると、お組は細い背を柱に委ねて、ぼんやり紺青にさえてゆく夕暮の空を眺めて居る。
「あゝつ」
醉覺めの清造は大きなあくびをして、筋肉のたるんだやうな赤ら顔の醉眼をとろんとさして、離れへ通ふ細い椧の廊下をわざとらしくゆつたり歩いて來た。さうしてお柳を見付けると揶揄つてやりたいやうな面持をして奥座敷へ這入つて來た。お柳は清造の顔を見るとにや〳〵笑つた。
「こひつめ。」と、清造は笑ひながら云つた。お組はその聲にびつくりして、頸を振り向けた。清造は、どつかと腰を落して胡坐をかくと、右の手に下げてゐた煙草盆を膝の前に引き寄せて縁近く坐つた。
もう部屋の内はうす暗くなつて、人々の顔もはつきり見分けられなかつた。お柳は立つと電燈のスヰッチを捩つてから、清造の後へ行つて稽古三味線の絲をゆるめた。清造は三味線の音にやうやく氣

がついて、
「師匠はもう歸つたのかね。」と聞いた。
「えゝもうとつく。」
お柳はちよつと頸をかしげて清造の顏を見ると笑つた。清造は水油で光つてゐる結ひ立ての、淺葱の布をかけた結綿のお柳の髮を指で突いた。
「厭よ髮を毀しちや。」
體をゆすぶつて笑ひこけながらお柳は長い袖を手にもつて、甘つたれるやうに清造の背中を打ちつゞけた。可愛い、圓い薄絹のような下ぶくれの頰をふるはせながら。
中の間の長火鉢の前で、母親は細い銀烟管を持つて煙草を喫つて居た。
お柳は盜むやうに母親の方を見て、こびるようなしなを作つてにつこりした。母親は人の好さゝうな顏をして默つて笑つてゐた。
庭の面から吹いて來る秋風も冷たく、四邊にだん〳〵せまつてくる夕闇に、黑板塀の外の柳の植つた川端にはせはしく豆腐屋の聲が聞え出して、お組は悲しくつてたまらなくなつた。しづかに中窓の下に行つてお柳の方に美しい襟足を見せて坐つたお組は、自分の三味線の絲の調子を合せてゐた。細く絲のふるへが響いてゆく、遣る瀨ない心に泌み入るやうな、咽び泣くやうな音色が靜かなゆふべのなかに消えてゆく。お組はその美妙な餘韻をぢつと聞いて居た。切ない情緒をそゝるやうな絲の音につまされて、お組ははろ〳〵泪を流した。
清造はお柳に彈かせて、まづい北州を唄ひ出した。

「そんな調子はづれぢや私に彈けない。」

お柳は厭々彈いて居るやうに笑つてばかり居た。お組は騷々しい座敷に居たゝまれなくなつて、つと御師匠さんのお膳をもつて臺所の方へ行つてしまつた。

お組は玄關の格子戶を開けてそこに寄りかゝつてゐた。奧座敷の方は片づけられてゐるらしかつた。臺所の水口でがちや〳〵瀨戶物を洗ふ音さへ、お膳立ての音がやかましく聞えるので、お組はやつぱり落ちつく事が出來なくなつて、逃れるやうにうす暗い離れの小座敷へ來た。お組はふとそこの濡れ緣にお柳が居るので腹立たしくなつた。

お組はぷいと出て行かうとして廊下に出たけれど、何となくお柳がいとしくなつて、引き返すと後からやさしくお柳の肩に手をかけた。お柳はしやがんで、掛軸かけを持つて何かしてゐた。お組は妹が一生懸命に力をこめて抑へて居る竿の先をふと見た。

「あッ、厭だ。」

思はず叫ぶとお組は氣味の惡さに、自分の體を抱きしめた。

廣い庭の奧の椎の木の下の叢にはよくとかげが居た。さうして時々、池の向うの小山にあるお稻荷さんの石崖の上や、汀の芝生の中なぞに這ひつくばつてゐる事があつた。

お柳の抑へてゐる竿の先には腹の赤い大きな蜥蜴が象牙の叉に、細い尾を強く抑へられて、くるつくるつとのたうちまわつて居た。

お柳は夢中で振り向きもせずに、死に物狂ひで逃れやうとして居るぶざまな蟲を視つめて居た。慘たらしい少女の嬲り殺しに逢つてゐる蜥蜴は命のかぎりもがくので、一生懸命におさへつけられ

た尻尾は、今にもちぎれさうに象牙の叉に喰ひ込んでゐた。

尾を切られても蜥蜴は逃げのびるのであらうと思ふと、お柳の胸は熱して來た。お柳は竿の先を濡れ縁の方へ撥ねると、白い脛を露はに出して庭に飛び下りた。さうして右の小さな足の指先で蜥蜴の頭を、ぎゆうつと蹈みしめた。爬蟲類の大嫌ひなお組は、體をぶる〳〵慄はせて、

「お柳ちやん、喰ひ付かれるわ、逃しておやんなさいよ。よう。」

と、言ひながらお柳のうすい肩を突いた。さうして縁の下を見ると、

「あらッ。」

と、けたゝましい聲を出して座敷へ逃げ込んでしまつた。

蹈まれた蜥蜴は、恐ろしい力でお柳の指さきから苦しげにぬら〳〵と這ひ出した。さつきと同じやうに尻尾を踏みしめられながら眞赤な舌をちよろ〳〵出してお柳の脛へしがみ付かうとして居た。

お柳の顏は赤くのぼせて居た。

お柳は竿の先で突つ突き廻してとう〳〵その蜥蜴を殺してしまつた。

お柳とお組は、濡れ縁にしやがんで、放り出された慘らしい蜥蜴の、ちぎられた頭の方がまだ時々薄暮の中にぴくり〳〵と動くのを見て居た。

お組は頭の一部が動くたび、水をかけられるやうにぞつとして怯えた。

蹈みにじられた土の上に、放り出されて居る無慙な蟲螻が、ぴくり〳〵と肉を動かす度毎に、ちつと見極めてゐるお柳の胸には嬉しさが込み上げてゐた。お柳はすつかり疲れてしまつた。

烟草の畑

岩淵百合

輕便鐵道

烟草畑なかをよぎりて一臺の玩具に似たる汽車はしるなり

炎々と太陽の照るさかり走りゆく一箱の汽車煙はく見ゆ

くねりくねり走りゆく汽車そのなかに人の頭のならび居る見ゆ

ヘルメット

烟草畑なかに消えゆくヘルメット今太陽はてつぺんにあり

うすいろの花咲きければ烟草畑擴葉しげりてかがやきにけり

烟草畑人は見えなく七月の太陽はえんえんとかがやきにけり

夏祭り

夏祭りわつしよわつしよともみあひて神輿かつげば雨のふりくる

雨ふれば軒に立ちたる若い衆の肩にしみたる提灯の紅

×

祖師山に森の小鴉むらがりて飛べば海堡に灯のひかるなり

海の上ひかる灯の數一ツふえ二ツ三ツ四ツふえにけるかも

戀じに

望月れい子

夜の濱に君がおとせし差櫛の今朝はあとなしひるがほの咲く

莖ながきつゝじの花の一輪を左手に持ちて見はいねにけり

春すぎてうぐひす啼けば鎌倉の麥生の路の日影偲ばゆ

君が胸にうれひこと〲忘れたる夜は憎からぬ春雨の音

波の音はるけし夜半の松林うちつれ行けば蛙啼きけり

赤き金魚硝子の鉢にいたいけにふるふひれよりにじみくる戀

おなじ世に君あり布を投げしごといねて思ふにたよりあるかな

活動の小舍のピアノのつれびきも心を遠にさそふすべなさ

君に逢ふ心地するかな掘割の水むらさきによどむを見れば

青きかげ吾子の瞳にうつりけり月をみいりて何と思ふぞ

何となく身のようもなき心地して街をし行けば寂しさ覺ゆ

月よしさともしび消せばかたはらにこひしき人のありと思ひぬ

あぢさゐの花の上吹くそよかぜの素足に觸るゝ高き緣さき

淺くさの觀音堂の朱のはしらうるみて見えず君を思へば

うつし世のほかまで君を見むと云ふ心のうちに身も消えにつゝ

一莖の花行く水に浮くごとし運命の手を奇しと思ひぬ

雨あがり並木の風にそよぐとてならはしめきてさなさびしみそ

夕されば樓に灯ともり五位鷺のさけびてすぎぬ夏やいくたび

われ君があとをしたひて死ぬべきや君がかひなによりてはつるや

芼莨（きんほうげ）咲く日となりぬ戀しさに狂ひ出づる日あらむとぞおもふ

瓜の花

世良田優子

雑司ケ谷のわが家しづけし夕くれば烏は鳴いて歸りゆくなり

いつまでもねてあらんかな晝しづか立木ぞ深き家にかへりて

眼さむれば烏は鳴いてかへるらし母はくりやに物切り給ふ

しげり合ふ青葉の梢を夕けむり立迷ひつゝたゞよふあはれ

そよぎ合ひし軒の青葉のしづまりて雨となりゆくわが夢ごゝろ

瓜の花今さかりなる畑にて子等は日ねもす遊ぶなりけり

雨上り庭の立木はゆれやまず露のしづくはしたたりやまず

起き上れど何か身内の悲しさに又うつぶして目を閉ぢにけり

梅雨空の今宵は月のあるらんかほのに明るく空ははてなし

ふとさむればこゝはわが家かかりすみの家に一人は悲しかりける

ま[illegible]近くなりけん鶏は高なけどかりねのゆめは
うつゝもあらず

今宵しも秋立つらんか夕風の倚り冷たく肌にし
むなり

名も知らず色さへあはれなき花の庭一面に散り
しきにけり

こゝは君が門邊ぞ月はほの白く梅雨の晴れ間を
かゞやきにけり

色　彩　（ゴルスソシイの囚徒より）

道路の片側は橄欖樹の列樹(なみき)。他の片側には薔薇が纒ひ付いて居る玉蜀黍色の控邸が並んでて、色の褪せた鍍月が見え、門の門札の名は消えて讀めぬ。正面には無暗に繁つた小藪の中から手入もせぬ高い椰子が一本ひよろ長く斜に出て居る。その横には深紅の衣物が一本の綱に掛けられて居る。永遠の午睡の便服である！　頭上の空は青玉色(サファイア)、西の方だけ金色に燃えて居る。欬風に颯々と椰子の葉の搖るゝ音、山羊の首玉の鈴がチリリンチリリン、燃える木の香、蛙の啼聲。

二階の窓に淡褐色の籠に頭の黄色な鸚鵡が一匹「ニクリ、ニコラ」と鼻聲で歌つてゐる。

子供が三人前を通つて仰いで見る。太陽がその帽子の下をカッと照らす。三人が『スクラッチ、ア、ポオル、ポオル』と呼ぶ。

一番年上の髮毛の美しい英人の男の兒が立停る。仰いで見て居ると頭の罌粟のやうな、眼の黒玉のやうな、短い赤い衣物着て、房々した黒褐色の髮を垂れた少女が出て來て戸口に立つ。男の子はためらつて、帽子を掴みのけて顔を赤らめて立つた儘で居る。少女は皮紐一ぱいに括つた小さな本包を圓々した手に振りながら出て行く。少女はほん一寸の間振返つて見る。その少女の聲が朗々と囀く。自分の飼つてる鸚鵡と同様。聞いた言葉(英語)を繰返すのだ。『はーあーやく、お寢なさい、いーいたづらの子ー伜さん』そして輕い嘲笑をする。その男の子は頭を垂れ帽子を掴んで、突然走り出す。少女は日に向つて歩んで行く。

健康と美

——ギルマン夫人——

岡田幸子譯

上

人間の力量と知識に比較して健康と美の一般の標準が低いと云ふ事は人間生活中に散見する多くのパラドックスの一例である。總ての生物は地水火風との爭ひや、內外の敵から苦しめられる。即ち獲物を漁り步く森の獸や「暗中を步む恐怖」其他無數の隱れてゐて、內部から體を襲ふものがある。一般に野獸には優秀なる一定の標準がある。もし一疋の熊なり、鳥なりを打ちとめたとする。とそれは其の種屬の立派な標本であるそしてそれを貴方達が御覽になつて「まあ何んて醜惡なんだらう」とか「これは病氣なのに違ひない。」と云ふ樣な事はありやう筈がない。

どんな獸でも人間が馴養して、天然自然の習慣に關涉すると、病氣なるものがやつて來る。犬は人間に次で最も病氣にかゝり易いものださうである。其の次は馬である。私達人間は野生の馬や犬の正當に發達した、優秀なる健康と美を見ると、實に慚愧に堪へない。

無知蒙昧な原始時代の長い間病氣は神樣からの罰の樣に思はれてゐた。今でも此の事を信仰してゐるものは、かう云ふ風に、人間を苦しめるのは神樣の特權だと思ひ込んでゐる。肉體は病氣の世嗣者

だ」と、丁度遺傳で天賦のものであるかの樣に云はれてゐる。僅かに近年になつてから、病氣は神の手から下される、打擊だと云ふ此の古い信仰を大に研究し、且反駁爭議した結果、多くの病氣の諸原因中あるものは明瞭になり、それを除去する方法も段々解り初めて來た。

然しながら人と云ふ人は、殆ど誰れでもいくらかづゝ缺陷變態を持つてゐるものだと云ふのは、確かに眞實である。(不均整な顏だち、不完全な視力、頼りない消化力、定まりなき神經系統)「非常な健康體」だと云つてゐる時でさへ、計り知られぬ運命、即ち苦しんだり、早逝したりする事がある。もしもそれが笑ふべきものでないにした所で、人生をいやな恐ろしいものにして仕舞ふ。

極くまれな場合を除いて、普通は美に對して、期待を持つて居ない。貴方の行き逢はれる群衆中の顏想(形像)を御覽になり、繪畫彫刻に現れた、正しい人間美の標本と、一般の男女と比較し、そしてかく迄行き渡つてゐる醜惡の共通原因はないか考へて戴きたい。

のみならず、人間の不完全な身體は、衣服の掩ふまゝになつてゐるが、一體衣服は健康と美を增す力があるであらうか。實用的ではあるが醜惡な男服、不實用にして、且つ馬鹿らしい女裝は、人間美に何等かの貢獻があるであらうか。家を見られよ。殊に富者の高樓を。——それらは一體美觀であらうか。

人間は充溢せる美しき世界の中に住み、それに貢獻する所の物は、「美中の美でなければならないと云ふ事を知らない。私達は室内の純重な醜惡にひたり、無趣味な倦怠をもよほす灰色の配合を、「立派な趣味だ、」と云ひならはしてゐるが、唯、小兒だけは正直に眞の美を求めて止まぬ。然し、小兒の教育は全然これと反對のものであるから、成人するに從つて此の正直な觀念はなくなつてしまふ。

無智、貧困及び特種職業の惡結果等はそれでも健康と美の標準を低下せしめた理由であると云はれてゐる。鋤を持てる人（ミレーの描ける畫題）は過勞のあまり、腰が曲つて牛の兄弟となり、（米國詩人エドウイン、マーカムの鋤を持てる人をうたひし詩に此の句あり。）家屋塗りはペンキから、鉛毒をうけるそして總ての産業は職工に惡影響を及ぼすものだと種々の書籍に書いてある。

是等の原因は或程度迄は眞實であるが、全體の原因であると云ふ事は出來ない。百姓は過勞の爲に腰を曲げてゐるが、然しこれが消化不良やリウマチスの原因だと云ふ事は出來ない。

次に貧困こそ總ての原因と强辯確說する人がある。實際貧困は大多數の原因である。けれども多くの給料を貰つてゐる會計係よりも、食ふや食はずの野蠻人の方が進んでゐると云ふ事、又は富者の怠惰な夫人よりも、貧乏な百姓の女房さんの方が强健であると云ふ事に氣付いたら、貧困も充分な原因と云ふ事は出來ない。

それから無智こそ、これを解決する原因であると云はれてゐる。然し、學者でも醜惡で、しかも喘息を患つてゐる者もあるし、自ら醫者ですらも、誇るべき美しさもなく、たいして健康だとも云へない人がある。富豪の秘藏兒で生れて以來むやみとあらゆる注意をして來ても、尙見かけが弱々しくとても結婚なんか出來さうもないと云ふのがある。

是等の原因はそれ〲標準を低下するのに、あづかつて力あるものであるが、其の原因が、はるかに共通的な他の原因がある。私達の小さな祖先、即ち獸類を見て、よく眞タイプを保存してゐる事を觀察せしめよ。

一體タイプと云ふものは、均力整狀、所謂「自然淘汰」によつて出來るものである。周圍の變遷に從

つて、それに順應しなければならない。もし順應出來ないとすると、死滅するより道がないのである。生活してゐる者は、自分を保持して行けるのだと云ふ證據である。地球上に殘存してゐる總ての生物は勝利者だからであつて、多くの劣敗種屬は死亡滅絶するのである。鹿は疾走すればこそ（不斷の疾走の使用）生存を繼續し美しくすこやかにして行く事が出來る。私達の讃美する豹の滑らかな強力は、生きる上に種々活躍する事からして、進化して來たものである。生物は生きるために、毎日生涯を通じて長い間或る事をするが、その事によつて、その動物が現場ある狀態を作り上げるのである。

然し一方には他の大なる自然がある。その力によつて、一切の動物は其の種屬の有する一定の標準に則つて行く。その自然力は性的淘汰である。私が嘗て誌した樣に、天然自然を通じて、男性は種々雜多である。男性の精力はウォード先生が定義されて「男性の開花」と呼ばれる、裝飾的副產物の形をとつて澤山出來る方に精力を使用したのみならず、全く非裝飾的な、非實用的な、非願望的などの形に精力を消費してゐる。

これに反して女性は餘り變化しず、ほゞ元のまゝである。そしてその任務は多様な男性中から、種屬にとつて一番價値ある者を選出するのにある。緊張した男性の競爭場裡に於ては、勝利者は必ず抵抗力が強く、自分の周圍を變更する事が出來なければならない。人間仲間のどれをも敗かす程、強いのである。此の高等な選擇作用は生存に必用な諸特色を進化せしめるのみならず、所謂美、即ち純正美的質となす二次的のもの迄も發達させる。二人の中で生きて行くものは、皆一定の處迄步調をそろへて行かねばならない。そして兩親になつた者は、それ以上に頭角を現さねばならぬ。實に立派な配劑ではないか。

人間歷史あつて以來、新しく生れた意識と不完全な知識を以つて、自然法則に干渉するのは、有害な事であつた。

古代の所有的家族制度は、婦女子を奴隷の如く偶し、囚人の樣に幽閉し、夫の意志に服從させ、種屬のタイプを保有し、且進化せしむるそれらの活動からは直ちに絶縁させてしまつた。

速度と云ふ單純な性質を取つて考へられよ。人は自由に速に走る動物に出來てゐる。野蠻人中には今、尙此の狀態を見る。彼等は數哩、數時間を疾走し得る能力を持つて居る。人間屬は鹿屬と等しく、本來からすれば疾走し得る步態(ゲイト)があるのである。さて鹿の中で牝鹿は步くのをさし止められてゐると假定して戴きたい。牡鹿は自由に山上を驅け續けるのに、牝鹿は洞穴の中で暮してゐると云ふ風で何事も不釣合である。

かくして女を狹い範圍の仕事、多くの場合には家事に幽閉して、自然淘汰に干渉し、その結果として生ずる健康と美を害してしまふ。もしも總ての男が覆面をし、化粧し、後宮の裡に隱れ、天幕や屋內にのみ生活し、家婢の仕事ばかりしたならば、種族の上に起つて來る所の影響は、容易に看取する事が出來る。我が勇敢なる勞働者、堂々たる兵士、運動家はかゝる狀態の下には出現しやあしまい。女を外光から遮り、屋內にのみ押籠めて置くのは、それ自身有害である。その上、女に許されてゐる職業は健康と美の高等な標準を發達させないのである。かくして、私共は種族の半ば、即ち婦人から、彼等を强める自然淘汰と云ふ勢力を剝奪してしまつた。そして種族の標準を低下したのである。

然しながら此の事のみが、かゝる惡影響を及ぼすのではない。性的淘汰の自然法則を全く覆へすと云ふ事は、それ以上不都合な事である。押籠め及び制限の下にあつても、女は此の淘汰作用に依つて

可なりに種族の標準を維持する事が出來るのは、全く不可能ではない。然しこゝに男性中心文化の大なる誤謬がある。女の所有主、即ち主人は意のおもむくまゝに賣買贈與をし、勝手に振舞はふと企て遂に男は選擇者となつた。

それは單純な變化の樣に見える。元始時代に於ては、自然法則を全く知解しないものだから、かゝる傷害の結果に對して何等の疑惑を抱かない。然しながら近代的知識の光に照らして見ると、事の眞相は明々白々である。婦人は自然淘汰の有益な働きを奪はれた。元來、性的淘汰は苛酷ではあるが、進歩を促す効果を持つてゐるものであるのに、男は勝手に自分で、それから脱脚してしまつた。

女は自然淘汰を求めないで、只、主人を喜ばせる能力ばかり要求してゐる。男は性的淘汰を求めないで、女を腕力で手に入れるか、金で買ふ權能を要求する。

家婢となり、或ひは家事管理婦となるには、女性的知識、氣力、熟達、健康及び美の非常に高い標準は必要がない。それが證據には一般の下僕を見られよ。

女をかゝる狀態の元に置くには、男の知識、氣力、熟達、健康及び美の非常に高い標準は不必要である。

生理的課程の根本に於て、人生の紀元に際し、人は自然法則を壞敗した。そしてその結果に苦しんでゐる。

人が以前持つてゐた美よりも、一層美を進めたのは、選擇者としての男であると、或る者は考へてゐた。そして、北米の土人の女と比較して、我々白人の女の方が魅力に富んでゐると指摘する。これに對する第一の答辯として以下に申し述べる。北米の土人は退歩せる一の種族であり、且つ男に服從

してゐる。有力なる比較をしやうと云ふならば、現代の白人の女と、母權制度の中に生活せる婦人との間にしなければならない。然しそれは明らかに不可能な事である。充分に驥足を伸べ、天與の自由を變改せざる狀態の中に生きてゐる女は、地球上にない、けれど人間の力と美の自由と活動とに伴ふて、發生するものであると云ふ事に就いて、異說紛々たる有樣である。

第二の答辯は下の樣である。男が女の美しさと云つてゐるのは、全く人間としての美ではない。男性の目に訴へる或る點が格外に發達したのを云ふのである。前に申し述べた如く、格外に肥滿してゐると云ふ事は、丁度此の場合に相當してゐる。實際には弱點で、能率を增さず、不健康な點を女の美だと考へてゐる。思案熟慮して選擇したる女が、關係的に小さいと云ふ事は、種々の點から見て、眞の人間の進步に一大痛棒を加へる事である。我が向上の旅程を續けるに就いては、一寸法師の樣な祖先を背後に捨てゝもつと大きくならなければならない。然しながら不自然にも男性が選擇者の地位を得たから、實益と感情に訴へて見て、「自己の所有してゐる女」が己れより小さい方が都合が好い理由があるので、男性は人の大きさの標準をつとめて低下したのである。前代の小說中に於て、私は次の樣な句を常に讀む。「あの男は男子の立派な標本だ。」――「あの女の金髮の頭は、やつとこさ男の肩しか屆かない。」――「あの女は實に美しい人だ。女の中で一番小さい。」かくして配偶者を得、戲談にも男の子は「父の後を追ひ、」女の子は母にならうと云ふ事は、想像するに難くない。他の動物の品種を改良するのに大騷ぎをするくせに、人間は大きさの標準を低下しまいと思つて、大に熟考して大きいものと、小さいものとを、かけ合はすと云ふ樣な事はついぞした事はない。

男性として、彼は極端に女らしくある事を焦求し、種族の上に起つて來る影響に就いては、何等心

痛めない。選擇をするのに、企策を廻らさないのである。男が女を養ふのには、丁度病人を手渡しする樣な弱い肉體を持つてゐる女を選び、そしてそれを好むのである。遂に一種の女を作つてしまつた。その女は男の選擇力に實にぴつくり合つてゐる。何故なれば、女は時として、その醜い事を知らないで、女の男を引き付ける點に、美と云ふ觀念を與へてしまふ程になつたのである。

例を上げて申ますれば、長い間家だけに幽閉して置いたと云ふ事、重き衣服の制服、尙一層重く壓する傳習的禮義等は女を不釣合な短い足にしてしまつた。これは特別に賤しい有害なる特性であつて、婦人の中に養はれ、男子に遺傳する。此の事は女を極端に幽閉してゐる種族の中に於て最も顯著である。然し或る一人の女が、此の傾向から脱出して、大腿骨、脛骨普通の長さになり、臂肩が尋常の高さになつたら、肥矮な女共は、其の女を批評して不細工だと云ふのである。（未完）大正五、七、三

梅雨晴れの畑に小草を取らんとて來て見れば野は靑く靜けし
恐しき夜の山鳴りに心悸えともねの妹を搖り起しけり
蚊を燒かむ蠟燭の火のあまりにも赤きが故に心悸びゆる
何やらん唇をのみうごかして寢返りをする妹の愛しも
はてしなく夜は更け行きてさわみなし我がいのちただ闇にあまねし
くらがりに一人眠ざめてこの夏の夜更けの頃をほゝえみにたれ

——後藤櫻子——

傷つける實

岡本かの子

○

忘られじ
あでやかに晴れやかに
あまたゐならぶをみならのかたかげに
ただひとりうらはかなげに淋しげに乗る我をの
みはじめより終りまで
しみじみとみつめてありし七月の夜汽車の隅の
若人の
青やかにふかくも冴えし眉をひとみを。

○

あながちに
迷へる君をせめまつる我にはあらじ
父母のなげきをも見ずはらからの名をも思はで
ひたすらに戀に走りて
たゞおのが感情(こころ)ひとつを満し得ぬ
おとなしき君が性をも
なつかしむ我にてあれば。

――以上。この詩形の何なるかを自も知らず、ただ我が「みじかうた」を解きがてにする稚き傍の人の、かくもつづらばいささか我が「うたのこころ」解きも得んかとのこころみなり――

○

いたましく傷つける實をたゞひとつ
摘みてたゝづむ紅苺畑。

赤い帯

吉屋信子

おしづさんは、私の父の異母弟のこどもだつた。

私のお祖父さんは―こんなこと言ふのは嫌だけれどもお妾を持つて居たので、お妾の子が私だちの叔父さんにあたる。だから、おしづさんは私の從姉であつた。

なぜか、私の家ではおしづさんのことを、あんまり大事にしなかつた。

私の父も母も、けつして惡い人ではなかつたけれども、ずいぶん私ら兄妹が、たくさんゐたし手がまはらなかつたりしたから、それに、父も母も悲しいことに、まだ神樣のお心をよく知らなかつたからである。たしかに。

おしづさんは私より二つ三つ年上のやうだつた。そして私などよりぐつと心持もませてゐたやうであつた。

あんまり口數はきかずに、いつも水底に咲く藻の花のやうに、沈んだ瞳をして、ぼんやりと何處を見つめるとなく涙ぐんで見入つてゐるやうな、ひ弱い娘だつた。

おしづさんには、お父さんもお母さんもなかつた。よくは知らないけれども、きつと死んでしまつたのであつたかもしれない。

大きくなつてからも、おしづさんの身の上をしつつこく母になぜきくと、（こどもは知らなくつてもよいことだからね。）と叱られたりしてしまふ。から私はよくはわからない。

たゞ、いまでも一番はつきりとわかることは、おしづさんが可愛想な娘だつたことである。

私はよく思ふ。おしづさんがいまゝで生きて

ゐたならば、私と仲よくして、そして私はきつと哀れなおしづさんを慰さめてあげ、その行く手の唯一つの力ともなつてあげることが出來たらう—にと、しかし、いくら思つてみたとて、それは永久に返らぬことであるものを、私はさびしい……。

　おしづさんと私はよく二人で遊んだ。ぢやんけんをする時に、私が、鋏を出すと、おしづさんは、慌てゝ紙を出した。私が紙をだすと、それを見てから石を出すやうにした、だからいつでも私は勝つてゐた。

　お手玉をしても、私は無器用だから、鹿の子模様の奇麗な縮緬のお手玉を掌にあやつりかねてゐた。

「おひとつ。おふたつ。おんみつ、はなして、
　おさァらひ。」

と、きれいな聲でおしづさんは數へてゆく。私は、せつかく掌の上にのせた、赤いお手玉を、ぽたんと取落してしまふ、そんな時、おしづさんは見てゐたくせに知らんかほをして、やはり

「おんまの、のりかへ。」

などゝ、づんづん先の唄をつゞけてゆく。

　そして、おしづさんの番には、器用な指先をわざとかたくして、お手玉を取落すのだつた。

　考へれば、おしづさんは、つゝましい、めざとい娘だつたのである。

　でも、その頃の私は、おしづさんの心の中を思ひやりもせず、私には何んの小さい反省もなかつた。

　たゞ、生れつき、おしづさんは私の遊び相手に、かうして與へられたものと思つて不思議がりもしなかつた。

　周圍のならはしとはいへ、ほんとに恐ろしいことである。

　しかし、そんな我儘なことを、神様はいつまでもおゆるしにはならなかつた。

　おしづさんは私だちの前から天國へ召されたのである。

　夏の暑い日だつた。

　お客が、おほぜいあつて私の家はごたごたしてゐた、お湯へ子供らを入れるやうに、母が女中にいゝつけたけれども、臺所もいそがしく

誰も小さい私をかまつてくれない。

手拭をぶらぶらさせて、すねてゐたら女中が來ておしづさんといつしよにおぶうにお入りなさい、おしづさんによく洗つてもらつてね。など丶私の機嫌をとつて、おしづさんを呼んだ。

おしづさんはどこか隅の陰からでも出て來たやうに、しよんぼり靜にそこへ來た。

二人は湯殿に入つた。

二人はいつしよにお湯に入ることは、物心ついてから始めだつた。いつでも私は母といつしよに入るのだつた。おしづさんは、きつと後で女中だちと入るやうだつた。

二人は湯殿の前の少しうす暗い板の間で着物をぬいだ。

私は菊の花を藍で染めた元祿袖の浴衣に牡丹の花と龍の輪を織りだした赤い襦子の帶を貝の口に締めてゐた。

その帶はもとは、よそゆきのだつたけれども、少し前ふだんにおろしたものだつた。それをしめると、可愛げてよいと皆の者が言ふので、あんまりおしやれでない私にも、そんなことからお氣に入りの品だつた。

二人は裸になつて、ぢやぶぢやぶとお湯をつかつた。おしづさんが私の背中をきれいに洗つた。私も「い丶のよ、たくさん、」と斷はるおしづさんの背中を無理やり面白半分に洗つた。ごろごろ手拭をまるめて、わけもなくおしづさんのやせこけた背中を撫でまはしたのだから、さぞおしづさんは氣味がわるかつたらうに、でもおとなしく。

「さつぱりして、い丶氣持。」など丶、おせじを言つたりした。

私は珍らしく異つた人とお湯に入つたのが面白くて嬉しかつた。いろ／＼ふざけて笑ひ聲をたて丶騷いだ。

あんまりおそくなるからと、おしづさんは氣をつかつて身體をふいて上つてしまつた。

私は、(大丈夫叱られないからもう少し入つてゐやうな。)とぼちやんぼちやん手でお湯をた丶いて湯槽の中に波を起しながら言つた。

おしづさんはやはり氣せはしく湯殿を出て行つた。

私は暫お湯の中で、水いたづらをしてゐたけれども、一人なのでさびしくなつて、ろくにからだをふきもせず湯殿を出た。板の間で着物をきて桃色のつけ紐を結んで帶を締やうとした時、あの私の赤い帶はそこになかつた。見まはすと、少し離れた所に、紫色のうすぼけた細いメリンスの帶が置きのこされてあるばかりだつた。それは、おしづさんの帶らしい。

私は、すたすたと廊下を走つた。母の許へ帶がないと言ひに行かうとしたのだつた。

行くと廊下の向ふに、おしづさんが立つてゐた。向ふの壁には小さい姿見が掛けてあつた。その前におしづさんは私のあの赤い帶を締めて大きなお太鼓に上手に結んだ姿を鏡に寫して澄してゐる。

「あら、私の帶を。」とかう私は立ちどまつて叫んだ。

私が、いつになつても悔いるのは、この言はないでもすんだ、ひとことである。

おゝ、この時、おしづさんの美くしい樂しい夢は、あえなくも鏡の面から破れくだけて消え失せたのであつたものを。

「ごめんなさい。………。」

おしづさんは眞赤になつた、そして寂しい顏にやがてなつた。すら〳〵と、お太鼓にせつかく結んだ赤い帶を切なさうに解いたのである。たゞ、それだけのこと―私は思ひ出すと、もう、むやみと涙が出る。おしづさんが亡くなつたのは、私が女學校の寄宿舍に入つた年の七月だつた。私は母の手紙でおしづさんの地上にはゐないことを知つたのだつた。夏休みになつて家へ歸つた時に、庭に咲いてゐた紫陽花の萼の房の色の、うつろつた佗しい姿が、悲しいおしづさんの俤のやうな氣がして、哀れな心もちになつた。その夏休みの間、私はおしづさんのことばかり思つてゐた。或る日蟲干をするのを手傳つて、ゆくりなくも幼ない頃の赤い帶が出て來た。私は恐しいものに會つた樣に、胸がふるえた。なんだか、悲しくて寂しくて仕方がなくなつた。

それから、のことである、かうして十字架の片端をおいたいと望む心になつたのは。

（一六、七）

脱走

（マリイ、スクロク、The Life story of a Russian exile の一節）

齋賀琴子譯

　そは眞夜中なりき。萬物は眠り鎭まりて、聞ゆるものとては我窓下を歩む哨兵の嚴めしき足音のみ。しづかに床の中に伏したるまゝ、我は我枕をさりて縫目を破り、男子の着くべき衣服をとり出しぬ。兵士は殆んどたえず我窓を覘き見るが故に我は身體を動かさんことを恐れき。我は打震ふ兩手もて自ら長き髮をきり、手巾を頭に卷き、男子の裝ひをなしたる上に更に囚人の着くべき灰色の上衣をつけ、かくて準備を終へて横はりたれど眠ること能はず、また、眠らんと欲せざりき。我は思へり、今や我長らうべき時は僅かに數時間を殘せるのみ。再び Aakatui に行かんよりはむしろ、兵士の彈丸に打たれて獄屋の石墻の外に墜ちなんものをと、午前六時頃起き出づれば太陽は常のごとくかゞやきほゝえみて我窓に昇れり。されど我心にはそのほゝえみに答ふべきものなく、その光を反射すべきものなく、――たゞ暗くして落付かざりき。時は容赦なく刻々に移り行く。我心は次第に冷靜になり、時には心臟の皷動する響も殆んど聞えざるに至りぬ。最後の散歩をなさんとして庭に出でたるとき、例の斧を打ち下す音は我耳に達せり。石墻の罅隙より我は二人の囚人が勞働せるさまを見るを得たりき。彼等は看守臺に至るべき梯子をば建てつゝありて、一人の兵卒に依て看守せられたり。我は我眼の前

の次第に暗くなるを覺ゐつ、最早望は失はれぬ、獄屋の門もまた他の兵卒の看守するところならんものを！

時は十時を報じぬ。我は斧の音の響き來る石墻の近くに立ち、而してその斧の音は一打毎に我柩の蓋を釘づけにする音のごとくに思はれぬ。されど我はふと一案を思ひ浮びぬ。我を護れる看守に向ひて室なる我書籍を携へ來べきことを求めて去らしめたる後、手をもて石墻を打たゝけば斧の響はハタと止みぬ。

「モシ皆さん、皆さん！」

「何だ？」と荒々しき聲は聞えぬ。

「貴方方の番人はどこにゐるの？」

「今一寸の間居ないんだ。彼奴は安心して居るのだ――我々は逃げやしないからな。吾々はあと三日務めればいゝんだ」

我心は喜びもて躍りぬ。我は一躍して門に近づき、囚人の上衣を脱ぎすて、聊さかの音をも立つることなく門の下より板をとり外してしづかに這ひ入りぬ。我が地上に立上れるその瞬間、あだかもその最終の持場にまで來りたる守衛の兵卒は我方に顔を向けぬ。我は一隅に立てる車を見、而して十歩にして其處に達すべきことを思へり。されどこの一秒時間は我ために限りなき時のごとく思はれ、我と車との間のこの僅かなる距離は到底達し得ざる隔りとなりぬ。我は身動きだにせず、あだかも哨兵の狼狽せる眼をもてこの場所に鎖がれたるがごとくに立ち居たりしを覺ゆ、不意に一彈唸り來り風を切つて我が頭上を飛びぬ。されど煙の晴れやらぬ中我はすでに車内にありき、彈丸は我が周圍に落ち

て散亂せり。我は追手を逐ひ拂はむがため狙ひ定めず空中に發射しつ。忽ち追跡し來る兵卒の眼をのがれて Irkutsk の通りに至りぬ。全き幸福、自由なる幸福の感じはわが全身に溢れき。我は町中の埃臭き空氣を吸ひ込みしがそは我をして、薔薇や菫の香に浸るがごとく感ぜしめぬ。我は最早獄屋の石墻を見ず、而してこの狹き往來は我ためにははてしなく廣く思はれぬ。わが乘れる車は烈しき速力にて走り、我はます〳〵獄屋より遠ざかりき。正しく死ぬべかりし我は今自由の人となりて市街を見、灰の石墻に圍まれたる獄屋の中ならぬ世の人々と相見ることを得るなり。わが頭腦は旋風の如くに渦卷きぬ。我は霧をすかして通行人の顏を眺め、あだかも彼らは我に向つて微笑し、わが恐ろしき獄屋の石墻を越ゆることを得たる大膽をば共に祝ふかと思はれき。

わが車は木々の茂みのかげ暗き、とある豪奢なる住家の前に止まりぬ、我は跳び下りてベルを鳴らせば從僕と覺しき一人の老翁戶を開けり。

「誰々は居りますか?」と云ふわが質問に答へて彼は何人も不在にして夕刻ならでは歸宅せざるよしを告げつ。わが車はすでに去り、而して我は追手の兵士に發見されざらんためには一瞬時をも失ふべからざることをわきまへたり。我はこの市街を知らず、且またかゝる服裝にて市街に出でなば忽ち人眼に觸れんこと必定なり。「この家に這入らなければ私は自滅するのだ」と我は思ひつ。みるからに老衰したるこの老翁の顏を打ながめぬ。彼は戶によりて動かず、何人も家に在らざるよしをのみくり返し居たりき。

「聞いて下さい」と我は女らしきやさしき聲にて云ひ始めぬ。「私は此家へ這入らなきやなりません。私はこの服裝で此處からよそへ行くことが出來ません。私を助けて下さい」

我は戸を閉じた玄關に歩みよりて彼の手をとりつ、「急がなければなりません、巡査や兵士がぢき此處へ來ますから」

老翁は全く困惑して我をみつめたるまゝ一語をも發せざりき。彼は驚きのあまり物云ふ力を失ひたるならんと我は思ひつ、彼は我を室内に導き、簞笥と戸棚とを開き、やがて我が着せし男裝の衣服をば燒き棄てき。突如として玄關のベルのけたゝましう鳴るが聞えぬ、そはわが跡を追ひ來れる巡査ならんと思ひて。

「ねえお翁さん」と我は老翁に云ひき。

「後ろの戸から私を逃して下さい。そしてこの出來事を一言でも口へ出してはいけません。でないと萬事お終ひですからね」とかく云ひて我は彼が依然として無言のまゝ、指示したる方向へと走りぬ。

我は何人よりも强き決然たる歩調をもて歩みつゝ、この市の地形を想ひ起さんとつとめつゝ市街を歩みき。凡そ一時間あまり探したる後、我は懷中せし宿所書の家をば發見せり。出で來れる三十――三十五歲位と見ゆる男子に我名を告ぐれば彼は我兩手をしかと握りしめ、强く打振りて、狂氣せるごとく。

「おゝ何たる奇蹟！何たる奇蹟！眞晝中に大勢の番人の眼の前で！」とくり返しつ止まざりき。我はかつてこの人を見しことなけれど、その聲の强かりければ彼は我がために援助者たるならんとの望を起しぬ。

やがて十二時となりき。我が牢獄を脫れてより僅かに時間を過せるのみなりき。N――はその室に我を潛め置き、市中の狀況を見んとて出で去りぬ。我はやう〳〵にしていかなる問題が我が前に横は

れるかをばしみ〴〵と思ひみぬ。獄内にありける時我が唯一の思索はいかにして脱れんかと云ふにありき。一度脱れ出でゝ自由の身になりたるとき我身におしよせ來べき多くの困難については思ひも及ばざりしなり。「如何して隱れやう、何處へ行かう?」即答を促がすはこの問題なりき。我は我が仲間の悉くが直ちに取押へられ、彼等の助力を得て我は憲兵隊の手に渡さるべきことを思へり。

N――は歸り來りて新らしき衣服を我に與へつ。

「この家から出るのが最上の方法です。貴女が今隱れて居るこの家は巡査にとりかこまれて居る、して我々は從僕を信ずるわけに行かない、彼はありのまゝに何もかもしやべるかもしれません。私は妙案を持つて居ますが、だが途中監獄を通つて行かなきやならないのです。あすこを通つて行く決心になれますか?」

「そして貴方は」と我は問ひき。「もし私と一緒に取押へられたら如何なりゆくか御存知ですか?」

我はN――が革命に賛成せることを知れり、されどまた彼は決して革命運動にあづからざりしこと、及び彼は妻と二人の子供を持てることをもしれりき。

「そんなことは構ひません」と彼は答へつ。

「ではまゐりませう」

我は眞白なる衣服をつけ、ブロンドの假髮をかぶりぬ。日はうらゝかに晴れて、太陽は柔らかなる光を我に注ぐ。我等は牢獄に近づき、而して我は病院を見ることを得き。(かの病院の小寢臺の上に我は八ケ月の間臥し居たりしなり)かしこには手術臺ありき。我は我がために唯一のなつかしき人なりし醫師達の顏を思ひ出でぬ。彼等は此世の人、自由の人なりし故に我はなつかしと思ひしなりき。我

は我が五箇年の月日、五箇年の恐ろしき年月を過せる、かの嚴しき勞働を强ふる牢獄を思ひ起しぬ我が友は未だかしこに生きながら葬られてあるなり。今や我は我が心に神聖と思はるゝものすべてに向つてかく誓ひぬ。我は彼等を忘るゝことなかるべし、我が生命は彼等に捧ぐべしと。わが乘れる車は牢獄の傍を過ぎ、忽ちにしてそれと遠ざかりぬ。されど我心はなほかの牢獄の上を去らず、我は多くの人が鎖がれたるこの牢獄に我もまた繫がれて六年の歲月を費したる、その間のくさ〴〵のことを思ひぬ。我は自由の身となりぬれど、そはたゞ外面の自由にすぎず、我はかの暗き石墻の中に殘し來し人々の上を決して忘れ得ざればなり。

我等は目ざせる家に着きぬ。そは町の片はづれに建ちたる、廣き邸園に圍まれし家なりき。この家に住居せる一家は極めて貴とき家柄にして財豐かなる人々なりき。彼等は革命運動に何の緣故をも有せざれど、この家の母なる人は敎育高き進取的の婦人にして政府が國事犯人に對する待遇をば、つねにいたく厭はしきことに思ひつゝあるなりき。我身の事情はこの家の女主人を除く外家族のすべてに固く秘せられ、女主人一人のみは我が如何なる者なるかを知れりき。我はこの家に女中として傭はれ、かくてすべての疑ひはかきけされ、いかなる質問も退けらるゝ筈なりき。我はしばらくこの家に止まらんがため、我全力を盡して女中の役目を果さんものと思ひぬ。

我は下女の衣服をつけ、下女の務をば身に引受けぬ。

陽は地平線の下に沈み、四邊は次第に暗くなりき。大空は神秘なる夜の維につゝまれ、星はそこかしこに輝き初む。六年の間我はかくひろ〴〵とせる夕暮の空の下に立ちしことあらざりし。されど今我心には喜びなくして怖れあるのみなり。我は身體を動かさんことを怖れき。暗黑なる夜の中には何

物か潜むものゝありて、そは到る處にて我を脅しぬ。かゝるとき思ひもよらずある柔かき腕は我を抱きよせ、而して何人か我に接吻せむとしぬ。我は我手に熱き涙の潜々として墜つるを覺えつ、そはこの家の女主人なりき。見ず知らずの他人なりしこの婦人は我が母のごとくに我を慰めんとし、而して我胸の燃ゆるごとき憤の念をばやわらげぬ。

此心やりどころなくたそがれの青葉にくらき部室に默せり

うち默し一人しあれば黄昏は我を包むと迫り來るかな

淡き灯をしたひて來るうす青き虫の羽音のやや耳につく

悲しみもよろこびもなくうつろなる心に君を思ふ夏の夜

風少し窓のあたりのつる草にそよげるが見ゆ夕となれば

湯上りのおしろいの香よわれもかも少女なればとつけても見しが

しらけたるこの夕ぐれの町にして何者もなし泣くによろしき

――幸島德子――

海の響

江森笙子

さぎり降る夜の庭より白百合のにほひ來たるに
身じろぎもせじ

力なく力なく夜具にもぐりけり起き出づる日も
あらさるが如

音もなくたゞ淋しさの渦巻ける中心にひとりた
ゝずめるなり

いかばかり我れいかばかり大海の響きをひとり
きゝふけるぞや

深々と海を見入れる我が息はたゞ深々となるば
かりなり

生ける身のこの悩ましさもだもだとあやしき熱
のうごめきてあり

さぎり降る青葉の庭にうちひゞく鋏の音の清ら
かさかな

温かき我が肉體をはつきりと愛して生きる我れ
となりけり

我が生（いのち）ひとつをさへも負ひきれぬ日もあるもの
をさはなみだしそ

又夢をきづき居しかと思ふよりうちつき崩す心
地よさかな

静かなる冷めたき緑に物言はぬ人のまろべり栗
の花おつ

栗の花みだらに散れる六月の眞晝の庭のなまめ
かしさよ

曇り日の窓

三島紅子

打濕りはかり知られぬ梅雨の空心もとなく屋根に飯干す

いちにちもなくてならねばこれやこの勿體なしと屋根に飯干す

はる〲と眞下に見けん群啼きて飯干す屋根をめぐるからすは

白き飯食まゝく欲しもこらへかね屋根に降り立つからすは三羽

からすはも飯はまんとてとたん屋根覺束なくも歩みよるなり

雀はも飯を案じて遠巻きにからす守りてこらへたるかも

今ははやからすは居ねば専念に飯はみて居り雀ひと群

青木立こゝの桐さへさやりせず夕方まけて一人寂しくも

しとゝなる雨のさなかに花ざくろゆらゝに紅し告げやらましを

手に巻けばまつはる儘にぬけ出てぬ一筋かくも長き黒髮

たまゆらに思ひ偲ばゆ染めわけし海ほゝづきの海の匂ひに

海ほゝづきふくめば海す匂ひすれなぐさみかねて仰ぐ夜の空

梅雨の頃

戸津たりゑ

雨まじり青葉をゆする風の音手枕まけば涙おち來ぬ

しみ〴〵と肌うす寒き梅雨の空眺めてまたも思ふ遠人

なんといふ此さひしさぞ閑古鳥啼きやみてまたもふりいでし梅雨

閑古鳥啼きたられしか彼の大木はなれてゆけりわが身さびしも

泣きも得ず目に觸るゝものすべて憂しほと〴〵わが身もてあましける

君が話きくとしもなくきゝながら眺めてありぬ太陽の沈む山

うち見やる彼の連山に暮れの色せまれば何やら涙ぐましき

人多き家内のなかにともかくも晝はまぎれてありにあれども

さびしくうらわかき日の夢にさへ君を見ぬ日のつゞく此頃

悔の涙にむせびつゝありあたらしくおのが心見え來たる時

星の輝く夜

山田たづ

志保はつと立つて縁端に出た。

月のない、暗碧の、目路の上にひろ〳〵と海のやうに擴がつた空には星の光が緑玉（エメラルド）のやうに輝しく見えた。ひいやりと絹の肌觸りのやうなしつとりした夜風が湯上りの濕つた後れ毛のこぼれた頬の邊りをそよろと吹いて、軒の伊豫簾をコトリ〳〵と欄干に音をさせてゐる。鱗のやうに密生した、庭の茂つた青葉はざわ〳〵とさゝめくやうに搖れてゐた。

『好い夜だ………』と、志保は泌々思つた。苛々しい思ひに逆立つやうに成つてゐる志保の感情も、此しつとりと濕つた周圍の光景に抱かれて、何となく自然に和らかに解けほぐれて行くやうであつた。志保は何となく靜に落着いて來たやうな心持でまたつと軒を仰いだ。と、恰度其處には未だ灯の入つてない岐阜提灯が部屋から洩れる僅かばかりの灯影に、黑ずんだ緋房の色を見せてほつかりと薄闇の中にぼやッとした白い輪廓を浮かしてゐた。志保は不圖思ひ附いて、蠟燭を搜してそれに灯を入れると、序に部屋の中の電燈を消して仕舞つた。二尾の鯉がついと勢ひよく泳いでゐる繪模樣が吉野紙の面にくつきりと浮いて、流れの水もちよろ〳〵と動いてゐるかと疑はれた。

――と、背後に恭治が忍ぶやうに立つてゐた。

『あら』と、志保はそれに氣が附くと思はずも輝かしいやうな歡びの聲を立てゝ、花が開いて行く時に、花瓣が微かに顫へるやうな自然な微笑を唇に漾はせながらそつと恭治の浴衣の袂に縋つた。

『あたし、些とも知らなかつた！』と、志保は其處の欄干に凭れるやうに坐つたまゝで、顏を上げて薄闇の中に男の白い額の邊りを見詰めてゐた。輝いた恭治の眼が志保の胸に喰ひ入るやうであつた。

『足音も些とも聞えなかつたわ……』

『お前は薄情だからさ』と、恭治は態とそんな言葉を使つて、志保が掴んでゐた袂を放して身を捩つた拍子に、矢庭に其纖弱な手首を取つてそれに自分の唇を押當てた。

志保は凝乎と涙ぐましいやうな心持に恭治を見詰めた。志保はつい今し方まで心臓の血が燃え盡きて仕舞ふやうな苦しい思ひに恭治を思ひ詰めてゐたのだつた。そして恭治の來ると約束した時間がもう餘程過ぎてゐるのに志保は氣を苛立たせて、全身の血が沸き立つて、乾盡して行くやうな氣がしてゐたのであつた、胸の肉を目の荒い鋸でごし／＼と挽かれてゐるやうな苦しい思ひでゐたのであつた。そして恭治の顏を見るなり矢庭に口を突いて突走り出やうとする恨の言葉を含んで靜乎と斯うしてゐたのだが、志保は此恭治の燃えた眼を見ると、其恨の言葉の一片も唇に泛ばなかつた、そして目の邊りに其人に會つてゐると云ふ安らかな思ひに激した感情も靜まつて、志保はもう寄り縋つて行くことさへ得しないのであつた。志保は何となく放心したやうな氣持で取られた手を放して離れた向ふの欄干に凭れに行つた。

恭治のしつきりなしに吸つてゐる卷煙草の火が紅玉のやうに輝いて、濃い煙がゆら／＼と薄闇の中

に紫色に棚引きながら簇つた青葉の蔭に消えて行く。

沈默が數分間續いた……周圍はあざやかな匂ふやうな夜であつた――志保は未だ默つて居た。

『如何したの、怒つたの』と、やがて恭治がふいと口を切つた、志保は何となく口を利きたくなかつた、

『如何したの、え、志保さん』と、又恭治は重ねて言つた。志保は此美しい夜と、此匂はしい情緒にひつたりと包まれてゐる胸を現實の言葉で破つて仕舞ひたくはなかつた、志保は未だ其儘で押默つてゐた。

『灯を點けて呉れないか、僕は咽喉が乾いてるんだよ、如何かして呉れ』と、やがて又男の少し濁つた、突走しるやうな聲が夢見るやうにうつとりとして居た志保の耳許に響いた。志保はやつと其處の欄干を離れて部屋の中に這入つて行つた、そして電燈のスヰッチを捻つた。明るい輝かしい光の中で志保はまた恭治の顏を見た、そして『何？』と言つたやうな面色を浮べて恭治の眼の色を讀んだ。

『麥酒でも可い、サイダーなんか可厭だよ……まア何でも可い』と、恭治は言つた。志保は默つて頷くやうな色を見せたまゝ輕い足音を立てゝ階段を階下に降りて行つた。恭治はよく何時も斯う云ふやうにうつとりと夢見るやうな態度でゐる志保をもどかしがつて、『そんなお孃さんぢや駄目だよ、もつとしつかりして呉れ、僕の世話女房のやうになつて僕をかばつて呉れ』と、言つたりするのであつた。

志保は今不圖そんなことを胸に浮べながら此家の婆さんに注文を吩咐けてゐた。

間もなく白いレースの被ひをした机の上にはちり〳〵と冷たげな色をしたコップが並んで、輝かしい電燈の光の中に美しいチエリーの色が泡立つた。水々しい色をした果物も硝子の皿に盛られてゐた。志保はいつぞや、志保がまだ恭治に對して斯う云ふ感情を抱いて居ない時に、恭治が志保に向つ

て斯んなことを言つたことを思ひ出してゐた。

『西洋ではね、ぼと〳〵と汁の滴つてゐる水蜜桃を二人で食べ合ふことが出來るやうになればもうそれで戀が出來上つたのですよ』と、其時に恭治が言つたのであつた。又いつぞや或西洋の小說で讀んだ、女が麵麭の切片に玉のやうな齒形を附けて男に渡した處などを思ひ出してゐた。が志保は自分ではそんなはしたない眞似をするのは何となく憚られた。

志保は斯うしてゐるのも、何だか只夢のやうな氣がしてゐるのであつた。志保は恭治を大して美しい男だとも思つて居ないけれども、恭治の自分を見る眼位世の中に美しいものはないと思つてゐるのだつた。志保は其恭治の眼の中に自分の有らゆる思ひを込めてゐるのであつた。さうして其自分の有らゆる何も彼もを投げ出して仕舞ひたい願ひであつた。

恭治は何時も斯う云ふやうに自分の前に、感情に咽んで物も言ひ得ないで靜乎としてゐる志保を矢庭に子供のやうに膝に抱き上げて、

『此人は私を愛してゐる？ 左樣、左樣、本當？』と言ひながら、其ほのかに白粉の匂ひのするみづ〳〵しい薔薇の花瓣のやうな頰や、其ふさふさした黑髮の上に接吻するのであつた。

『今此人は形の上で私の思ふ通りになつてゐるやうに、心も矢張斯う云ふやうに私に呉れてゐるの、左樣、左樣、左樣ぢやないだらう、此人の眼は冷やかな眼だよ、此人の唇は溫い血が通つてゐないやうな冷たい色をしてゐるよ』と、言つたりした。

志保は強く締め上げられるやうな心持の中に、微かに身動きしながら、『愛してゐる、只愛してゐる……』と言ひ續けてゐるのであつた。『左樣、本當？ 本當に左樣か知ら、だけど志保さんは可なり

『左樣ぢやない？ 左樣ぢやないのか、ぢや僕の言ふことは志保さんの言ふこと、僕の行爲は志保さんの行爲だと思つてゐて吳れる……そして其間に何等の知識も働いてゐない？』

志保は涙を含んだ眼で凝乎と恭治を見た。そして恭治の輝いた眼が自分の魂の中に深く〳〵喰ひ込んでゐるのを感じるのであつた。

『だけど、だけど』と、恭治はまた言ひ續けた。

『僕は斯んなにして居る瞬間にでも此人に對して全然嫉妬を忘れることは出來ないんだよ、此人は斯んなにしてゐて吳れる、斯んなに僕の所好なやうになつてゐて吳れる、そして僕を愛すると言つてゐて吳れる、併し、眞實に嚴密に言つて僕は何れだけ此人の心を摑み得てゐるんだ、何處に其心を摑み得てゐると云ふ確かな證左が見られるんだ――』

恭治は昂奮して、感情に顏の線を少し引歪めるやうにしながら言ひ續けた。

『僕は、僕はね、何んなに熱い抱擁の瞬間にでも左樣云ふ嫉妬を忘れることは出來ないんだよ、出來ないんだよ。そしてそれが常に恒に、僕の愛に憂鬱な蔭を造るんだよ。』

志保もそんなことを聞くと、本當に悲しくなつて仕舞ふのであつた。そんなに押詰めて考へれば、お互に何處に、確實に愛し合つてゐると云ふさう云ふ證左を見ることが出來やう、恭治の愛だつても左樣だ、それが本當に靈魂の底から沸き上がつた力でなく、只ほんの衝動で斯んなに自分を愛してゐるとしたら如何だらう、如何だらう――志保は冷たい刄の脊をコトリと身柱元に當てられたやうなぞうつとした氣持がして、恭治の前に顫へる唇を嚙みしめてゐた。

ふたりの人

岡田八千代

外は雨上りの道でぐちやぐちやにぬかつてゐた。

金杉で淺草行きに乘り替えると丁度向ひの所に二人の男女が腰かけてゐる。男は病み上りのやうに瘦せてゐるので老けては見えるが、まだ三十を大して越してゐるとは思はれない。女はその人よりも少し老けてゐる上に、顔の能く似てゐるところを見れば、多分その人の姉さんかとも思はれる。そして二人ともに大きな包を二ツづゝ持つてる上に女の方は蝙蝠傘を二本と傘を持つてゐる。そしてまだそんなに混み合ひもしないのに二人ともにチャンと包を膝の上に載せてゐる。

「其處へお置きよ、そして混んで來たら膝の上へ載せると好い。」

と云ふのが私の耳に這入つた男の第一の言葉であつた。

女は優しく「あゝ」と云つただけでやつぱり包は膝に載せたまゝでゐた。間も無く電車は混んで來て、二人は究屈に荷物を持つたなり身をせばめなければならぬ位になつてしまつた。

「家へ歸つて置いて見ればこの位のもの何でも無くなつてしまふ。」

これが男の第二の聲であつた。

「あゝ、さうともさ、なんでもありやしない。」
と女が云つた。
私は此二人を見てゐる中に無暗と物悲しい氣持になつた。そしてやたらに羨ましくなつた。その眼は人の顏を見るのを厭ふやうにいつも他へ向けられてゐる。その癖、姉らしい人の顏を見て物をいふ時だけは、強ゐて堪へて優しく取り繕るやうに見える。私はこの男をある戀愛からの失望か、或ひは不治の病の爲めからか、獨り淋しく世を呪つてる人のやうに思ひたかつた。
二人ともに、みなりは大變に粗末であつた。女は束髮に結つて秩父銘仙の細かい縞の着物に同じものゝ絣の羽織を着てゐる。半襟も縮緬であり、着物も絹物ではあるけれど、幾度洗つて張つたものか、垢づいてこそゐないけれども、もう縞目も型も朧になつてしまつてゐる。そして木綿の前掛をしめてゴム表の下駄を履いて、穢れた足袋には大きなツギが宛つてゐる。
男も同じやうな着物を着て――これは新らしい足駄を履いてゐる。そこにも優しい姉の情が見えるやうな心持がした――上に昔風なへり取りの二重廻しを着て、口髯を少し生やしてゐる。その眼は冷たくそして人々に媚びぬ威を持つてゐる。女の眼も男に似てはゐるが、ずつと溫か味があつて、泣いて泣いて泣き盡したが、まだ淚の泉は干き切らぬといつたやうな趣きのある眼を持つてゐる。その上白粉氣もしやれ氣も無い顏に、何處となく處女の淸らかさのうかゞはれる顏である。
私はどうしても此二人をある高い處から零落した人として見なければならぬやうな氣がしてならなかつた。しかもそれは自ら求めた事では無く、世の中のいたづらなものゝ爲めに落された連中の一人

と見なければならぬものゝやうな氣がした。そして弟の顏には、それを何處までも盛り返さうとしてる氣色が見える。姉の顏にはさうした弟を出來るだけの自分の力で慰めやうとしてる氣色が見える。しかも弟は姉に對する時出來得る限りの優しさを持たうとしてゐる。姉は又滿足して自分の一生を弟の爲めに献げてゐる覺悟が見えてゐる。私はこんな風に考へて行つて、悲しくそして羨ましく思はれてならなかつた。

暫くする中に女の着物が荷物の多いその重味に押されて膝小僧が出かゝつて來る。私はそれが氣の毒でならなかつたけれ共、敢へて上げるのは反つて恥しめるやうなものだと思つて控えてゐたが、しきりに氣になつてならなかつた。その中にいつか弟が心づいたと見えて注意すると姉は直ぐ着物を合して其合せ目へ前掛を深く掛けたが、その時女の顏には、幽かに紅をさした、夫を見た私はいよ〳〵その人が處女であるのを確かめたやうな心持がした。

二人は鐵砲町へ來た時下りる支度をした。弟が先づ立つと、

「まだですよ、此次ぎですよ。」

と一寸叱るやうに姉が云つた。

「だつて荷物をうまくしなくちや。」

と弟は我が儘らしく眉を皺めて云つた。

その言葉は叱るやうであり怒るやうでありながら其處に如何にも隔てのない姉弟の情が見えてゐた。

「でも雨が降らないで好かつた。」

と姉が云つた。

「降つても傘がある」

と弟が云つた。

「傘があつても差せはしない。」

かう姉が云つた時二人は顔を見合せて淋しく笑つた、これを見てゐた私は思はずさしぐむ涙を呑み込んだ。

小傳馬町へ來た時、弟が立つて姉も立つた。私は荷物を持つて遣り度いやうな氣がした。

「危ない、危ない。」

と云ひながら姉は弟を氣遣ひつゝ弟に追いて行つた。そして二人は無事に電車を下りた。私はこの二人に別れるのがあかず惜しいやうな心持であつた。――私はふつと又何處かで此二人に必ず逢ふのであらうといふやうな事が考へられた――（日記から）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

夜の町のにぎはひ初むる初夏は輕きなやみに宿しみのます。
果てしなき海のかなたに赤き灯のまたゝけるありあはれ寂しや。

――石井洋子――

ビアトリス社會員組織解散

皆樣の御盡力で無事に創刊號を出す事の出來たビアトリスは茲に二號を重ねる事となりましたのは本當に幸ひでございました。どうぞともどもお喜び下さい。猶日を追ふて皆樣の期待に反かず發展してゆくに相違ないと思はれます。就ては今回ビアトリス社では今迄の會員組織を全然解散して、從來の會員を直接購讀者といたす事となりましたから左樣御承知下さい。是れは雜誌經營上の或る事情からで、その理由を此處に明記は致しませんが決して社運に心配をお抱かせするやうな事ではないのですから其の點は安心して下さい。

附録

殘れる命 外三篇

河井醉茗

殘れる命

私にはまだ命が殘つてゐる
殘つてゐる命の火を
ふりてらし、ふりてらし
よいみちに捧げて行く

私の所有する命は
星の瞬くひまに
盡きてしまふかも知れない
たゞ
私の護つてきた命は
豫現であつた
私の殘つてゐる命にも
また約束あれ

ある時

私の足は地を離れさうに思ふ
思ふだけで決して私の足は地を離れない
私の歩きかたは確かだ
私の足が地を離れるなら
白日の光の下に
高く高く離れたい

大きい響と
強い力で離れたい
こんなにぶい力で
地を離れても
何の響がしやう
矢張足を地につけて
歩いてゆかう
人からはなれて
獨でゐる時だけ
地を離れさうに思ふのは嘘だらう。

鸚鵡

鸚鵡や、鸚鵡や
よく來たね
遠い遠い太平洋の海をよく越えて來たね
萠黃色の翼をすくめて
お前は何を考へてゐる

こゝろもち首を傾けて
しづかに
お前は何を聞かうとしてゐる
心配することない
私はお前を大事にしてやりませう
私たちが言葉が
お前には分らないのか
何をそんなに不思議な顔をして考へてゐる
世界が異ふのか
こゝもお前の世界だよ
お前が何んなに考へても
分らない世界だよ
でも安心しておいで
お前は私に護られてゐる
いつまでも考へてゐないで
早くよい言葉でも覚えてごらん

枕頭の星

ふと眼をあくと星が見える
私は室内に眠つてゐるのに空が見える
私の室は雨戸をしめない
硝子越しに
いつでも空が見えてゐる
宵には
月を見ながら眠つてしまつた
眠つてゐる間に
月は何處かへ行つてしまつたけれど
私は宵に眠つたまゝで
枕も變つてゐない
また星を見ながら
私は安らかに眠ります

編輯だより

■第一回社員小集は先月十二日午後一時から社で開きました。生憎梅雨の空は明晴定まらぬ厭なお天氣でしたから、來會のお方も少なからうかと心配した事でしたが、案外賑かだつたのは幸です。お顏觸れは來會順、五明倭文子、山田邦子、生田花世、山田たづ、久保田富江、村岡たま、杉浦翠子、山田わか、世良田優子、小林鈴子の諸氏で、河井醉茗氏が雜誌の狀況を案じて下すつてわざ／＼お出向き下さつたのはまつたく嬉しい事でした。

■當日の話題は別に纏まつた事ではないのでした。まあ皆初對面の顏を會はすのが何よりの事でしたので。唯御相談としては岡田八千代氏から五明倭文子を通してビアトリス社にお話しの故女流作家追慕會といふ事についての皆樣の御考を聞いて見ましたが、何れも結構でせうとの御意見でした。山田わか子氏が研究的會合を催すやうにとの御希望も亦皆んなで同意いたしました。段々實現されてゆく事でせう。五時頃樂しく散會いたしました。

■此次の社員會は矢張り本月の中旬頃場所は社員坂本野母氏の大森のお宅で催します。海が近くて大變涼しいので舟遊びをしようといふ話が只今出てゐるのです。何れ確定次第おしらせいたしますからどうぞお出で下さい。

■故女流作家追慕會は社員會とは別です。是れもまだはつきりと定つてはゐませんが、時はお彼岸頃で主として岡山八千代氏、田村俊子氏をはじめ二三の方がお骨折り下さるとの事です。明治以來秀れた才分を抱いて惜しくも世を去られた閨秀作家は、樋口一葉女史、大塚楠緒子女史、瀨沼夏葉女史をはじめ、まだ可成りあるやうです。若い私達は、一足先に歩いて行かれた此の人々に對して限りない愛慕を抱かずにはゐられません。皆樣もこの追慕會には出來るだけお出で下さい。

■ビアトリス社では社の副事業としてビアトリス文藝研究會を設立する計畫であります。是はつまり新しい女作家の搖籃となるやうなものです。此の會では主として作物の添削批評をします。又時々集つてお互に文藝研究をしたり大家の談話を伺つたりしたいと思ひます。會員は一般女子の方の入會を歡迎いたします。會費は一個月廿五錢、『ビアトリス』の無代配付を受ける事が出來ます。猶詳細の事は、往復葉書にて牛込區築地町六番地ビアトリス文藝研究會にあてて御照會下さい。

■所謂素人の寄り合ひで作りあげたビアトリスの初號については、定めし物足りない點が多かつたろうと思ひますが、吾々の作品と一緒に雜誌全部が修業中のものですから、お氣のすまぬ處は寛かなお心で許して、御注意して頂きたいと存じます。

■一番體裁のわるかつたのは短歌の組みかたでありました。實は同人一同も、出來て見て吃驚したやうな譯です、號を追つて、あゝも、こうもと試みて、一番氣にかなつたやうな組み方にするつもりで、本月の分はいろ／＼に組んで見ました。

■一般の愛讀者の方々からも、體裁や組み方などについて、特にお氣のついた事があつたら御知らせして頂きたいものです、何彼と參考に伺つて、出來るだけ引締めてゆきたいと思ひますから。

■短歌は一般愛讀者のどなたでもお寄せ下さつてよろしう御ざいます、但し紙數に限りがありますから多首のものはこちらで選んでなかの秀歌を發表いたすやうにするだらうと思ひます。

■編輯だよりの處を拜借して、お恥しいおことわりを致します。それは私の此度書いた脚本試作についてであります。あの原稿を送つたのは十三日でした、それからしばらく其事を考へないで居ましたが昨夜(二十日夜)眠られぬまゝにふとあの脚本の事を考へて、どうもあれではいけないと思ひたちました、いま一人人が加はらなければならないやうな氣がしきりにして來ました。たとひ拙いものとしてもあれでは一層乏しく思はれました、それでたまらなくなつて今日たゞ子樣と花世樣をおたづねしてもし間に合つたら一度頂いて來て書きなほさうと念ひましたところがもう印刷の方へ廻つて校正が出る位だといふので、實にお恥しいものを其まゝ發表いたします、然し、あれではどうしても氣がすみませぬから近いうちにいま一度書きなほして見るつもりで御座います、勿論同じ材料であります。人と對照して言ふのでなしに、自分自身に對して、これと心の止まつた作想(?)を、その物のよりよく現れる爲に作りなほし、練りなほして見るのも、まだ修業中の私たちには決して無益の事ではないと考へます。どうぞ同じ材料で二度發表する事をお許しになつて下さい。藝術を愛し尊ぶ御心の同情をもつてお許し下さい。(邦子)

■毎日々々ぎら〳〵と烈しい日の照りつける暑い日が續きます社の机の上には毎日社員の皆樣方や愛讀者の諸氏からのお手紙が數通乃至十數通も載ることがあります。それに一々お返事を差上げたり、何かするのが私の仕事です。私は氣ばかり焦つても自分の身體が弱いために、思ふ丈けのことが盡せないのが遺憾です。私は弱い身體に背負ひ切れない經營と云ふことや事務のいろんなことやの責任を引受けて了つて、今は可なりの疲れた氣持でゐます。私は今此のビアトリスを育てゝ行くためには自分の有らゆるものを犧牲にしやうと思つてゐます。さうしてどうかして此ビアトリスが確固たる地盤の上に築き上げられるやうにしたいものです。今社からも直接に愛讀者を募るやうに勸誘狀を出したり何かしてゐます。皆樣も何卒御援助下さつて、愛讀者の一人でも殖えるやうに御勸誘を願ひたいものです。そして別項にもあるやうなビアトリス文藝研究會と云ふのを社の副事業として始めるやうになりました。皆樣もお友達をお誘ひ下さつて續々御入會下さるやうに願つてゐます。(たゞ)

雜誌規定

□毎月一回一日發行

□定價一冊金貳拾五錢(郵税壹錢五厘)

□前金購讀料四ヶ月分(壹圓) 六ヶ月分(壹圓四拾五錢)
一ヶ年分(貳圓九拾錢)

□廣告料一頁(特(三拾圓) 一等(貳拾圓) 貳等(拾五圓)
三等(拾圓) 半頁(五圓)

□郵券代用は壹錢貳錢に限る(但し一割増)

□編輯、經營、會員申込上の事務は一切ビアトリス社宛
のこと

□原稿〆切期日は十日限りとす。

大正五年七月廿八日印刷納本
大正五年八月一日發行

編輯兼發行人 東京市牛込區築地町六番地 山田たづ

印刷人 東京市麹町區紀尾井町三番地 金澤求也

印刷所 東京市麹町區紀尾井町三番地 元眞社

發行所 東京市牛込區築地町六番地 ビアトリス社

發賣所 東京市神田區表神保町三番地 東京堂
電話本局四五六一番
振替東京二七〇番